

周易

特114

505



始



特114
505



想

竹
橋
順
子
著



東山



夜

又作



金風城遠行月村不長
小劍老飛出白泥泥
月在一津平田猶深地

大正甲子夏

龍溪宮本堂



有女居士	姓曰竹橋	俗名順子	禪諱渡月
鹿嶠之巔	禮拜舍利	鳳山之趾	打失真身
自爾以來	鄂州湖邊	不怪一婆	拋七箇兒
恁麼而後	屍陀林中	却憐七姊	求三般物
龐老家庭	靈女遊戲	淨名室內	天妃神通
吟笑岳雪	掬湘江流	同床同臥	誰知被穿

大正第十一龍舍壬戌八月

中央禪定閣主

實

嶽

題

參禪辨道，大丈夫漢而尚爲難也。況一婦人乎。竹橋渡月禪子，壯歲喪夫，慟哭不止，深感人生無常，謁我師韜光窟大休禪師求道，予以爲孱弱一婦人，旬日退去。師見其器不凡，痛下鉗鎚，禪子不屈，朝參暮請，寢食兩忘。予潛喜，屢激勵之。一夜入定，豁然大悟。爾來十數年，辛鍊苦修，間參洪嶽函應寶嶽諸老，造詣益深矣。今也年老，辭都門，卜居于相陽茅崎海濱。韜光晦迹，寒素自樂。如禪子，可謂真正學者。頃日禪子，回顧往時，著一書，題曰回想錄，求序于予。因綴數語贅卷尾云。

大正歲次癸亥初秋日

大隱居士

回
想
錄

緒言

總て世間一般の人は物事が順調に行けば唯々浮か／＼として此世を無事安閑に過し精神の修養とか徳性の涵養とか又は宗教心杯の起るものではないが一度逆境に陥る時は其精神の安寧を求むる爲めに神佛の加護を希ひ聖賢の教訓を思ふに至り此れ迄宗教は老人の慰みものの様に心得て居たのが自分も説教の一座も聞いてみたくなるのは俗界の常である諺にも苦しい時の神頼みとか言ひますが喩へば最愛の子を失ふとか妻を失ふとか又は頼みにして居る夫に死別れるとかすると始めて自分の心の慰安が無くなつて生死無常を感じ煩悶懊惱を始めて來るそこで阿彌陀様にすがる人も出來れば基督を此上も無く有難がる人も出來る又朝から晩迄南

無妙法蓮華經と御題目を唱へ團扇太鼓をボンボコと打ち鳴す人も出来る併しながら夫れは人々の根機次第であるから何とも言へぬが右の様な場合に遭遇した時には禪の修業に志した方が一番に近道である自分の心の入れ換へが出来て何とも言はれぬ心の力と楽しみとが得られるのが禪の修業である夫れ禪と言ふは梵語(印度の言葉)で譯すれば正思惟と云ふ正思惟の力に依つて根本の智慧を得ると言ふ義でつまり人間の根本の大智慧とて人々本來具足して居る心の本體なれども我々の普通に心と稱して居るのは無量劫來まよひの心で常に六趣に輪廻して居る禪を修業するのは其迷ひの心を悟りの心に轉するのであるが夫れには専ら坐禪をしなければならぬ坐禪とは外一切の善惡の境界に於て心念起らざるを坐と名づけ内自性を見て動ぜざるを禪と言ふと六祖大師は仰せられた又坐禪せば四

條五條の橋の上ゆききの人を深山木にしてと言はれた古徳もあれば何でも辛抱強く靜坐工夫即ち坐禪をせねばならぬ其坐禪には師家に就き公案と云ふを授かり朝から晩迄夫の公案を念頭に置いて坐るので坐り方にも夫れ〴〵方法が在つて結跏趺坐半跏趺坐とあるが女子は本坐をしないで普通蒲團に坐して姿勢を正しくし氣息を調ふれば夫れで善いのであるそして見性と云うて自己の本心を見付ける迄の辛抱は中々容易の事でないが其見性の第一關を確かにしないと公案の數をいくら重ねても遂に眞の見性は出来ぬのである又禪を修する願心は自利利他と云うて自身爲めに開悟さへすれば夫れで足れりとしては自利のみで所謂聲聞根生であるから是非とも利他即ち爲人度生言ひ換へれば社會的救済と云ふ覺悟を必要とする夫れだから禪を修する人も一寸どんなものかやつて見

ようか杯で師家へ参禪に来る人は辛抱が續かず忽ち顔を見せぬ様になる故に修禪も逆縁から入り来る人は根柢が確實で眞劍でやつて来るから長續きがして遂には難關を通過して何時も何れの禪會にも御互に顔なじみとなり所謂眞の道友となる自分も逆縁から入つた一人で老師方の御世話に預り最早や禪庭に足を入れてから十六年で本年は亡き夫の十七回忌辰となつた實に思へば盧生が邯鄲の假枕五十年の榮華も粟飯炊ぐ一睡の夢と歎ぜしも空言ではない自分は十五年間禪を修したとて何を覺えたでも無ければ何の功德が在つた譯でもない唯我見が少々取れた位で洵に慚愧に堪へませぬまだ容易に爲人度生の處までは行かれぬそこで自分が禪道に入つた經歷とでも言ふ程の事を述べて見ようと思ふ

大正十一年六月

相州茅ヶ崎石松軒に於て

渡月 竹橋順子識

回想録

蒔かぬ種は生えぬとか諺にもある通り悪しき因を作れば悪しき報いがあり善き種を植ゑれば善き實を結ぶ今日懶ければ明日は必ず忙がしい今日食べ過ぎた明日は腹具合が悪いと言ふ事は因果應報で自然の理だと思ふ自分は幼少より兄弟姉妹の中でも取分け父母の大恩を受け父母の膝下に長らく御世話に成つたが一人の兄(高峰讓吉)は十二歳の時から長崎へ遊學に出られ長姉は十五歳で嫁入りされ次姉は十三歳で親戚へ養女に參られ程なく先方で結婚せられた自分だけは幸に明治聖代文物の開け行く恵みに浴して加賀金澤に始めて女子の小學校が創立になり十三歳の時に入

學して學びの窓にいそしむ身となつた夫れから十六歳の夏に兄が始めて歸省をされた其當時兄は東京虎の門の工部大學(工學寮時代)に在學中であつたが歸京の時に自分も同道上京して湯島お茶の水の女子師範學校(今の女子高等師範)の入學試験を受け九月に入學許可となり此れから五年間寄宿舎生活を續けました卒業後久々で兩親の膝下に歸り家事の見習をして居る中に石川縣富山女子師範學校では是非との所望にまかせ一ヶ年間計り教鞭を執つたが(當時父は富山病院院長奉職)父が病院を辭し金澤へ歸るに付き自分も辭して同じく歸つた其當時自分は年頃とて處々より縁談の申込みもあつたが長し短しで自分の理想に協ふ縁談もなく皆々斷つてしまふた又兄も洋行中であり旁々延したのであつた其間家事の手傳やら弟妹の世話やら裁縫を習ふやら音曲に遊ぶやら學問以外に女の道をも一通り習

つた夫れ是れする中に光陰に關守なく四五年は夢の間に經過し妹もはや十八歳となり或る商家で知名な宅からは是非妹を嫁に呉れと申込まれた元々知り合ひの間柄で斷るに斷れず兩親も困り姉より先に片付けねば妹は差上げられぬと申込んだが夫れなれば婚約丈けして姉の片付け迄見合すとて妹は早や婚約成立となつた却説自分の身となれば兩親へ對して濟まず畢竟自分の理想が高過ぎ虚榮心に憧れあそこは不十分ここは氣に入らぬと高い望み計りする爲めに年齢のみ嵩み次第に良縁に遠ざかり今の次第となつた譯で先非を悔い遂に大決心して唯今の竹橋家へ縁付くことにしたが是れが禪道に入る遠因で又我儘の結果と思ふ當時自分の夫と定めたる人は軍籍にて陸軍中佐で聯隊長として廣島に在勤せられたが三人の娘と一人の男子を残して妻に死別れ後妻を採し國許金澤へ其叔父原老人が

歸省して自分方へ申込まれ同時に廣島在勤の父の友人伍堂軍醫正より申込まれた自分も今の場合ゆる母に誓ひ如何なる困難ありとも御心配は掛けまじく決して泣言は耳に入れませんから御遣し下さいませ又四人の子女は立派に養育して妻たる道は盡しますと言ひきつた母も泣いて承知して呉れられたから夫れで下男と出入の女とを召連れ原老人の供をして金澤より廣島に行き伍堂氏の御宅に落付き二三日休養して竹橋家へ引遷つた子供は十三歳を頭に女子三人二歳になる長男一人(今の倅)と都合四人の母と急になつた其上に叔父夫婦が舅姑の代理で中々舊思想の老人かて、加へて急に異つた家庭に入り込んだ自分今更ら當時を回顧すれば善く辛抱が出来たと思ふ計りである去りながら子女は可憐なるもので善くなつき何の隔てもなく成長して夫の愛の下に二十年間風波も起らず幸福に日

月を送り三人の女子は良縁を求めて夫れ〴〵片付き一人の倅は士官學校へ入學も出来たれば夫婦共々安心して喜び合つた其間に夫は立身して陸軍中將となり現職を解き豫備將校となつて閑散に日月を送られたが盈つれば虧くる世の習ひ明治三十九年五月に一週間餘のいたつきにて急に黄泉の客となられてしまつたさあ自分の精神界の打撃は此時頓に極度に達した此れが禪道に入る近因である。さて自分の此時の苦惱は中々尋常一様でなく此れ迄は夫と云ふ者の下に萬事きりもりもしたり又生活もし交際もしたが以後は自分が主となつて爾餘の所理をせねばならず倅を一人前にして嫁を迎へる迄にはまだ五六年の歲月もあり去りとて軍人の事でも多額の遺産のある筈もなく一朝にして収入は十分の一にも足らぬ自分の扶助料のみとなつた夫れゆゑ何とか収入の道も開かねばならず此周圍の

困難を切り抜くには確固たる自信の力を養はねば到底自分は病體に陥るやも計りがたき有様となつた幸なるかな同郷人で多年醫師として信賴する岩原玉溪居士の勧めに任せ同人の御宅にて毎月一回づゝ兩忘庵宗活老師の法話(禪海一瀾)と平林寺大休老師の(無盡燈論)の提唱を拜聽する機會を得た(岩原氏は一家學て參禪せられた)本來自分宅の宗旨は眞宗東本願寺派で故原叔父在世中は叔父は大の眞宗信者で毎月眞宗の説教は隱居の宅に開き善男善女人の來集あり他力本願の有難さを聞かされても自分は何となく物足りない心地にて他力本願は信じ兼ね却つて禪宗は自分の實家が臨濟宗國泰寺派の檀徒で娘時代には母に従ひ國泰寺先々住雪門老漢の提唱を拜聽した事も度々あつた位故に禪宗にて一と安心の出来る方をと岩原居士に話した岩原居士曰く大休老師は此頃本郷駒込蓬萊町勝林寺で毎

月幾日間提唱の會を開いて居られるから其方へ詣られ參禪を願はれたら如何ですとの事時日を伺つて勝林寺に至つた併し參禪は如何なるものか坐禪は如何なる方法のものか五里露中であつたが其折り今野大隱居士に入室の作法や坐禪の仕方などを懇々と教はり戰々として鞘光窟中に入り公案を授けられた是れ本來の面目なり斯くて宅に居ては朝夕坐禪を凝らしたが公案はそつちのけで有象無象と何年前の事迄が浮かみ出でがたと音がしても夫れに氣を奪はれる此れではだめと又公案に立ちもどる此の如く朝夕怠らず工夫をして居る勝林寺の會も四五ヶ月も行つたかと思ふ中に休會となる今野居士の發起で小石川見性會を今の會場戸崎町是照院で開會せられ毎月二十日から一週間提唱參禪との事ゆゑ自分も喜んで會員となり岩原居士も同じく參會せられた以後は一週間缺かさず辨當持

参でせつせと参會したが併し自分の宅は眞宗なのに禪宗の寺へ出入するのは親戚共に對しても普通の習慣上遠慮して成るべく目立たぬやうに修業するに若かずと心掛けたは今から思へば愚の至りだ其秋に四谷笹寺と牛込月桂寺とに見性會と言ふ同名の會が始まり故勝峯大徹老師と棲梧資嶽老師との提唱があり時折同會へ出席して拜聽し又資嶽老師へ入室参禪を願つたそれは確か明治四十一年今より十五年前の事と思ふ引續き毎月四谷の會へも出席入室も願つて居つた小石川の會へは一週間づゝ参會した或日大休老師の申されるには竹橋さんは一週間會へ來られる間丈けで又御宅へ歸らるれば心識の波は折角澄ましても又起り元の空阿彌の有様なれば平林寺の接心にでも御出でゝ大衆と共にうんと朝から晩迄坐禪をなされば餘程功驗がありましたやうとの仰せにまかせ宅の都合を付けて接

心に平林寺へ御厄介になつたが相變らず何の得力もなかつた其冬臘八接心に行つた今に忘るゝ事の出来ないのは七日の晚一時頃から明放して寒坐した事は一つの印象を残して居る夫れ位でまだくどうしてくだ或見性會日の歸り途にて平林寺の御弟子で其當時今の東洋大學に通學して居られた全磨さん(當今中野龍興寺の方丈様だ)と多福寺の御弟子の智良さんと(此二方は直日をして下された)三人連れで是照院からぶらくと夜道を歩きながら竹橋さんあなた本來の面目で苦んで御出だが夫れあの街燈あれは何ぞそら此電車此れは何ぞと指示されて何の事だか人を馬鹿にして居ると思ふ位で一向に氣が付かず夫れから又或る方が参禪すんで歸りに引違ひに参禪に行く人があれば某あれは某と夫々見ゆるやうではまだまだだめだと言はれたが矢張り某が某と見えるのでがつかかりした事もあ

つた夫れ是れして一年半許宅では朝夕に靜坐し會が始まれば辨當持參で朝から本堂に坐つた其當時俸は士官學校も濟み見習士官として隙中に起臥し日曜日に來宅するのみで宅には自分と下女のみ或日今野居士が竹も橋さん餘程困つたと見え顔色も常でなし最早見性もほどなしだ先づくいま一息うんと御すわりなさいと言はれたが其會期の末に漸く打成一片物我不二の境地を得て夢中で入室したが其時は自分ありながら自分も分らず所謂大死一番底絶後再び蘇る時節と言はうか老師に一撈せられて其心持ががらりと變つたまづ黑暗から一時に夜が明けたやうな氣持で其嬉しかつた事は今も忘れぬ是れ明治四十二年の春だつたと思ふ先きに全磨さんに言はれた街燈などの事が成程と自分で會得が出来た其後自分思ふには提唱で伺つたり今野居士からも御聞したが白隱禪師門下に三婆子と

言はれる女子ながら作家の手脚を持ちし人々もあれば自分も女ながら何年の歳月を倦ます怠らず修業したならば三婆子の足元へは行けずとも宗要の蘊義を盡し酒脱自在の境界までやり通したいと固き信念を持つて一層精を出して或時は禪關策進を読んで古人の刻苦の程を見今時の人の及ぶ所でないと感じ又古人は一則の公案でがらりと大悟徹底したと書いてあるが自分共の見性と言うても中々にすいものぢやこんな事で禪をやつた抔と安んじてはだめだ公案とても俗に千七百則と言ふ位あるし此れから法身機關言詮難透向上で練つて行かねばならぬと毎月の接心には缺かさず參會して四五年經過する中に面白味も加はり他の禪會へも顔を出して提唱を拜聽するやうになる湯嶋麟祥院の正覺會へも入會して早川惠勝さんの紹介で釋宗演老師に相見して入室參禪を願ふ又小石川白山道場で

宮路宗海老師にも參禪を願ふ此の如く四人の老師に就き提唱を伺ひ又參禪をした或人の言はれるには禪の要は打坐にあり竹橋さんのやうに幾人の師家に就き公案の數ばかり數へたとて何の役にも立たぬと一撈せられたが自分の思ふには朝から晩迄打坐ばかりして無差別平等の境地に尻を落付けて禪はこんなものだ寔に是れは善い境界だと其當時或奥様でそんな方がある御師家様から公案を授かつても夫れを御返しして公案なしに黙々と打坐して居られる思つても一朝何事が起つた時には一向に働きが付かぬ白隱禪師は之を鬼窟裡の活計黑暗の深坑とて大に呵せられた夫れであるから差別上(此世間で)へ出て働くには饒饒頭を喫むやうな難透難解の公案で自分の我知我見をどしどし打破つて行かねば眞の大解脱の境界に至る事は六づヶ敷いと決心したから人様が何と仰られても人は人、自分

は自分ときめ込んで管はず老師方へ參禪した夫れ是して俸も中尉に任官し嫁を迎へる時節となつたそこで一家の經濟の立つやうに六七年間に處理を付けたからいよく嫁を迎へ自分は小さき家に隱居して新夫婦に財産全部(ちつほけなものだ)を渡し月々食費丈け貰ふ事にして別世帯を營む事にした此際に自分に幾分禪の修業が無かつたら所詮敝履を捨てるやうにきれいに引渡して隱居する事が出来なかつたかも知れない此時分以下手な述懐をならべた。

我事已成心地新、箕裘最喜有其人、清風一脈聞窓下、自適悠悠退後身、
 任他五十二年非、自是殘生欲不違、梧竹叢中閒坐好、清風憂玉拂吾衣、
 却說いよく隱居の身となつたので先づ此の修禪が第一の楽しみとなり家事に氣を配る事も無くなり先づ専門的に禪書に眼を曝し公案の著語

や拈弄等に時間を費しても差支なき身となつた夫れだから他の御婆さん方のやうに芝居とか物見遊散に行く事もしたくなし一寸變り物のやうに成つて世の中の事は没交渉で過し自分は女でも今では男子と同じだと云ふ氣分で(當時はまだ修業があらひ)小石川見性會で沼津の和田居士や藤枝の橋本居士などと競争的に朝から打坐獨參をやり續けたものである右の如き有様で二三年繼續して居る中にたしか大正三年の夏かと思ふ四谷の見性會の幹事高木居士が夏期休暇を利用して同志の方々と寶嶽老師其當時の御寺西多摩郡五日市の廣徳寺へ修禪旁々避暑を兼ねて参りませんかとの御談で永田女史も参られますとの事早速御同意して自分の御友達松村さんも同道し一週間ばかり御厄介になつて皆様と共に打坐し參禪も願つた(松村さんは夫れが御縁で今に參禪を繼續して居られる)其折り高木さ

んの御話に洵宮術と言ふのがある其道は禪と立場は違ふが今日世渡りの上に大に功驗がある之を研究なさつては如何との事であつた松村さんと共に入門する事にした入門して見ると成程此迄善いと思つて居た事が自分の氣癖なので随分缺點だらけだそこで朝夕夫れを陶冶する事に注意した是れが餘程禪道の助けになつたと思ふ。

見性會創立七年于茲所感

朝結雙眉夕接肩、參禪問道七周年、自嗤個事終無得、唯見中庭白菊妍

見性會十周年述懷

十歲孜孜培不休、祖庭芳秀菊花秋、獨羞擔雪故投井、罔極師恩何日酬
 こんな事で大正八年迄月々各會へ出席した參禪を續けたが別段變つた事もない變り物と言ふ丈けは取つたつもりだが世間の婆さまより矢張り

變り物に違ひがないからどうか變つた所を取りたいと心掛て居る是の年十一月に身體の健康保全の爲現在の茅ヶ崎東海岸松林の中に一茅庵を建て、隱栖した別段世間がうるさいの何ぞと云ふ譯では無いが年々老境に向ふに従ひ寒氣に閉口した夫れで冬は暖かに夏は涼しと云ふ點から選んだのである古語に大隱は朝市に隱れ小隱は山林に隱るとあるが自分も小隱の仲間かしらん是れは人様の御高評に任す引遷つてから本年で足かけ四年目御正月を三度草庵で迎へたが月々大抵一度は上京して俸の處に行き孫達の顔を見るのを樂しみとして居る禪會の方は小石川の見性會と四谷の見性會丈けは都合をして一日二日必ず出席して皆様と共に坐禪をする事に決めて居る自分の隱栖は石松軒と名づけ白砂青松の間を朝夕波の音を聞き富士の雪を眺めるばかりで終日人聲を聞かず却つて鳥の音を耳

にする閑靜の處である先頃腰折れをものした

我友と契るは近き磯の松の葉ごしにかよふしき波のお

磯近く住み馴る、身も夢をさへ驚かずなり荒波の音

此程自分の古く御世話になつた原三幸子さんが久々にて御來訪あり自分に代り一首を詠ぜられた。

落葉のみ焚きてぞことは足りにけり松をめぐりの我か庵哉

庚申歲暮偶感

結廬茅浦二星霜 不管人間臘月忙 閒境興情言不得 瓶梅含笑洩清香

家居卽事

湘南氣暖可栖居 岳色潮聲心自舒 課罷斜陽窻裏入 青松影落讀殘書

辛酉歲晚偶感

霜鬢雖催氣未衰 健如壯者不親醫 君恩幸有足鹽醬 任爾忽々星月移

壬戌歲旦

玉曆循環此又新 六旬加二遇佳辰 向天先獻椒花頌 懽意無如壬戌春

自分の近日の境地を述べたに過ぎぬのである

却説前に自分が禪の庭へ足を入れてから今日迄の徑路を略述したが誠に御耻かしい事で自分の赤耻をさらけ出したわけ蔘かぬ種のはえぬ諺通り我儘の因を蔘いて苦しい立場にも至つた其苦しい境に陥つたから此禪道に蹈み込み其結果唯今では御蔭と安閑とした境界で居られる次第である併し禪を修するとして同じ坐禪をしましても其人々の根氣に因り深淺粗細の差は十人十色である悟りとは悟らぬ前の悟りにて悟りて見れば悟りけもなしと云ふ歸家隱坐の境界に至らねば本物とは言へませんが中々

自分如きはにすいもので善く老師方が提唱の御話に悟りの浅い深いの比喻に兎は水の上を渡るに上つらをかけつて通り象はどしりくと水底までも足を踏みつけ渡るとあるが自分などは兎よりも尙ほ上すべりだ併し修禪の道も是れで盡きた譯でもなく今日限り止すと言ふのでもなければ四句の風輪に鞭撻ち命の有らん限り否生々世々不斷相續して行く積りである。

衆生無邊誓願度 煩惱無盡誓願斷

法門無量誓願覺 佛道無上誓願成

回想 錄終

渡米日記

田
上
世
邦

田上

瑞
堂

瑞

序

高峰博士が、我々の親戚であるといふことは、我々に取つて、此上もない光榮であつた、人から聞かれて、博士は私の伯父であると答ふるときに、何時も一種言ふに言はれぬ誇りを感じた。

博士は常に我々親戚の誇りであつたばかりでなく、實に日本國民の誇りであつた、博士のなされた醫藥の發明は、世界的のもので、歐米に對し、日本國民の眞價を知らしむることに向つては、偉大の力があつた。

博士は殆んど一生を米國で過されたといふてもよい程長い間彼の地に居住せられた、随つて彼國の人々の間に、數多き友人と、有力な知己とを持つて居られた、博士は此關係を通して、彼の國民に、眞實の日本を理解せしめる

ことに就いて、不斷の努力をいたされた博士は常に言はれた、日米の親善に關しては外交は第二で兩國民が互に理解し合ふことが第一だと、博士が此主張の下に盡された功績は、外交官などの遠く及ぶ所ではない、我國は之に對して、心から博士に感謝すべきだと思ふ。

博士は鐵の如き身體と精神とで、長い間研究と努力とを続けられたが晩年動もすれば藥餌と親まれるやうになつた、大正十年の暮に急性の腎臟炎に罹られ、其後病勢が容易に衰へぬので、翌十一年四月の下旬に、博士に取つて最も親しき妹の竹橋叔母さんが、看護の爲に渡米せられた、五月の初旬に彼の地に著かれ、爾來心をこめられた看護の效もなく、七月二十二日に博士はとう／＼不歸の客となられた、叔母さんは涙の裡に野邊の送りをすませ遺髪を携へて歸朝せられた。

思へば思ふ程、博士の死は残念のことだ、學者としては勿論だが、日米の關係に於ても、博士に待つことが多いのである、特に昨年來の狀勢は、博士を憶はしむること愈々切なるものがある、今や墓木已に拱し、碑石漸く蝕せんとして居る、哀惜の情に堪へぬ者は、獨り我々親戚のみではなからう。

此渡米日記二卷は、叔母さんがものせられた其時の紀行である、山川風土苟も過ぐる所、纖細の筆で遺憾なく記され、處々點綴するに詩や歌を以てして居らるゝ、所謂錦上添花を添ふるものだ、此次承れば、遠からず梓に上せて、親戚や故舊に頒たるゝといふことだ、博士を追憶する上に於て、恰好の記念物である、一本を惠まるゝ日、鶴首して待つて居ります。

甲子暮秋雨瀟々たる夜城西對山莊にて

小甥 南 弘 識

緒言

生者必滅會者定離、と云ふ言葉は佛祖の經文中にあるが人間浮世の事は此言葉通りで、おぎやと生れて此世へ出れば晩かれ早かれ何時か死なねばならぬ又逢ふは別れの始めとやら云つて何百里の道中をして偶々遇ひに行つても三百六十五日一所に居る譯にゆかず遂に分袖せねばならぬことになる。蓮如上人の御文章に朝に紅顔ありて夕には白骨となる云々と此世の無常を示された故に人間は何時死するとも安心の出来るやうに常々心掛けねばならぬ其心掛けに二種あると自分は思ふ一には物質上、二には精神上である物質上と言へば貴賤貧富夫れく身分相應に餘裕を付けて生活し其餘裕にて社會奉仕とか慈善事業とかを十分に分相應に行ひ又妻子

の爲めに後顧の憂を少くして置かねばならぬ併しながら夫れ丈けでは因縁到來して死期の迫り來る時に自若として瞑目する事は六ヶ敷と思ふ故に第二精神の大安ん即ち精神修養にて何時死の迎が來りても豆腐屋へ豆腐買ひに行く心持で往生を遂げられる様に修行を必要とする此大安んを求むるには前編に自分の修養を述べたが我田引水で禪に因り安心を求めらるは結構であるが夫れは人々の根氣次第又は因縁次第故に耶蘇教よし佛教よし儒道神道よし何れにても其教々により安心して死んで往く處へ往く丈けである我々の立場から言へば一切此有爲の法は夢幻泡影の如くで畢竟無爲の樂天地に歸る丈けのことである故に上下貴賤老若男女皆死んで其行先終りの果は如何なる處であるかと言へば未生以前の端的始めも無く終りもなく喜怒哀樂苦樂得失を忘れ眞個不生不滅の境界に至る之を

極樂へ往くと云ふので耶蘇教では天國へ往くと云ひ神道では高天原へ往くと言ふ分けのほる麓の道は多けれど同じ高根の月を見る哉で何れの教でも安心さへ出來れば結構である若し安心が出來ねば何の教を信じてても皆無駄ごとである如是前置をして何を述べるかと言へば自分はしみじみ直感した事がある夫れは自分の兄の高峰讓吉氏が米國に三十年來居住して日米の親交を圖り又藥品其他の發明を成して世界の爲め將た日本の爲にどの位貢献せられたか分らないが此の二三年來兎角病魔に冒され藥餌に親しむこととなつた最初は心臓を患らひ昨年秋頃より全快して健康に復せられたが恰も華府會議開會中で何かと國家の爲めに奔走せられ又實業團の渡米されたりした爲めに身體に無理が出來て遂に十二月十五日から急性の腎臟炎で一時餘程苦痛を感ぜられ重體に赴かんとしたが幾分づ

つ快方に向ふも中々大病である夫れで自分に渡米して看護をしたり日本の話をして慰めたりして呉れぬかと電信でいうて来た夫れが大正十一年二月の中頃であつたそこで自分は喜で参ります此月の末頃迄に仕度して出發しても差支ないと返信を出したら病勢も幾分治つて居るから五月頃に着來する積りで出立して呉れと再度の返信委細は手紙で出してあるとのことであつた其手紙を待ち其内容が分明になつた夫れによると病體が少し宜しくあれば冬期中暖かな土地へ姉上看護婦同行で轉地療養をして歸つたらメリオールドの別荘で冬期迄靜養するから御前も來て共々同所で暮して見たい只今の假宅は手狭で碌な部屋を供することも出來ないからとのことで其次第も分り五月初に出立の手筈にして居つたが兄の病魔は中々にしつこく轉地などに出掛るほど快方に赴かず病勢は一進一退の

有様で萬一急に募らんも計られぬとて其家人より更に船室の出來次第渡米して呉れと電報が來た夫れで船の都合で四月十七日正午出帆の天洋丸で出立渡米することにした同行は三共株式會社の技師上中啓三氏と兄の秘書をして永年高峰家の爲めに盡される田口一太氏の兩君である上中君は十七年間も米國に居住して兄が「アドリナリン」を發明せられし時の補助役をなされ大に貢献されし方で今回も藥品の製造に關係し兄の依頼で渡米せられるのである自分は丸で聾の啞であるが幸と兩君の御蔭で海陸無恙五月九日に紐育停車場に着し直に令息夫婦と同車で「バセーク」の高峰假宅に到着した一日千秋の思ひで互に待ち焦れしこととて兄も病苦を忘れて喜ばれ感極つて互に涙のみであつた後で聞けば兄上には前日迄自分共の着米を秘してあつたとのこと夫れは長き道中を行くのであるから病人

が待ち遠がり心神を勞しては身體に障るとの姉上の注意から明日着といふ迄は言はずに置いたとのこと病氣に付き萬事姉上の注意は實に到れり盡せりで自分も涙と共に感謝すること多大であつた爾來六月七日迄姉上や看護婦と共に病室に出入して病人を慰め看護の手助け又は病人の苦痛の箇所を撫で或は摩りなどして居つたが病勢は相變らず一進一退なりしも自分の着米後は日々良好の結果で親友岡田博士も度々見舞はれ晝食丈けは日本食であるから彼是と庖厨場に往つて料理人と病人の好む物を調理して喜ばせた此分なれば全快して共に歸朝の望もあるかと喜び居りしも束の間にて竟に主治醫より全快の見込なしとの宣告を受けた姉上の申されるには日々の苦痛を見ながら死を待つも残念だからドクタ、アエンホンの氏の經營せられるレノツクスヒル病院に入院させて盡す丈けの治療を

施し病苦を減退して安樂に往生をさせたいとのことで入院することになつた姉上と看護婦は病院に附添ひ自分は毎日或は隔日に見舞に往き病人を慰むることとしたが生者必滅會者定離の理に洩れず七月二十二日終に眠るが如く不歸の客となられた其時の悲しみは紙筆の及ぶ所で無い七月廿五日には紐育第一の「聖バトリック」教會で盛大莊嚴の葬式あり式終りて市外「ウッドローン」墓地に野邊の送りを濟し同月三十日に涙と共に遺髪を持して歸朝の途に就いた往復四ヶ月間を費した夫れで聊か悲しき旅行を拙なき筆に記すこととした。

偶 感

齡過耳順氣猶雄 萬里行船激浪中 莫道東西言語異 搖眉動目意相通

留別次韵

一別天涯相見難 叙將懇款托毫端 舟中不寐懷君夜 好把斯詩月下看

大正十一年秋日

渡月 竹橋順子識

渡米日記

往路

大正十一年四月十七日午前九時十分の東京驛發横濱波止場行汽車にて
出立すべく四谷の宅を自働車で出掛けた東京驛に着すると親戚及知己の
人々自分の此行を送るべく續々と來らる此日太洋丸にて出立する人々の
數も夥しきにや流石の東京驛頭も立錐の地なき有様で自分を送る爲めに
來られし人々も見失ふばかりであつた汽車は二三等の差別もなく皆満員
立往生であつた海岸へ汽車が着くと直ぐ眼の前に見上ぐるばかりの巨船
が岸壁へびたりと横付けになつて大梯子で人々を船中へ送り込んで居る
是れが自分を載せて行く太洋丸なのである其有様は押すや奔すやで丸で

二
戰場か火事場の様な混雑加減である自分は汽車で着すると見送り人を後に残して田口君と同行して水上警察へ旅券の點檢に出掛け夫れが濟んで船中へ乗り込んだが自分を見送つて呉れた人々に却つて教へられて船室に入り手荷物を調べて後に見送りに來られた人々に挨拶をなさんと甲板に登らんとする折から出船を促す鐘聲に歸を爭ふ幾百人の見送人の降り來るに出遇ひ漸くのことで甲板へ上り此處で親戚知己に別を惜しみ自分は甲板上に止つて陸上を見渡した岸上には人を以て充滿し顔々相接して見送る人送らるゝ人船と岸とが相呼應し手を揚げ「ハンカチーフ」を振り分袖を惜しむ人情は上下の差別なく皆一樣である自分を見送つて呉れた親戚知己朋友の多數なりしを心に感謝した漸くにして大層高樓に等しい太洋丸は汽笛一聲徐々として岸壁を離れ今や港外へ向け進行を始めた是れ

自分の臍の緒切つてから始めて日本國を去り外國へ旅立つ門出である船は次第に進行し岸上の見送人も豆粒の如く小さくなり港口近く進めば此回御來遊の英國皇太子殿下の旗艦を始として護衛の任に當る我が艦隊も前後左右に整然と列を正して碇泊して居る其間を我太洋丸は徐々と港口を出で港外で暫時進行を止む是れは檢疫があつた爲めである(密航者をも檢査す)自分は衣類を着換へ室内の整理手荷物の片付などに時間を費した自分の船室は相客一名獨逸の婦人で横濱に十七年間も居住した人として多少日本語も解し自分に取つては大に好都合を感じた其人は米國を經由して獨逸に歸るとのこととで五十餘歳の方であつた。

夫れ是れして船は益々進行を續けた田口君と共に甲板に上り見渡せば東京灣の入口にて富津の海堡や觀音崎の燈臺等次第々々に遠ざかり左に

房總の山々薄霞み右を眺むれば湘南沿岸の翠巒も時々刻々と暇を告げ伊豆半嶋や大嶋群嶋の散在するのも判然と見分ることも出来ぬやうになり其後次第に海面は眞暗で波濤の巨舷を打つ音ばかりとなつて自分達も船室に入り休息した。

十八日 曇天多少の雨

夜來未だ船に慣れず是日は終日絶食寢臺に横臥して居た田口君も同様室内に籠つて居られるとのことであつた。

十九日 晴天

昨日に比しては幾分氣分も宜しく晝夕の兩食は焼パン紅茶位を少量に攝取して元氣を付けしも夜分活動寫眞の催しには見物に出掛る迄の勇氣も無く是日も横臥したり起きて坐つたりして一日を消した。

二十日 晴天又曇

今日始めて寢衣を脱ぎ常服に着替へボツ／＼田口君の室迄も出掛けた随つて氣分も快方で追々船の動搖にも慣れたものと思はれた。

二十一日 晴天

早朝より氣分宜しく晝に始めて大食堂に出て食事すべく思ひ甲板上の椅子にも腰掛け知人と暫時話などを交換したが又何となく氣分勝れず其儘室に歸り此日も前日の通り室内生活で一日を過した。

二十二日 晴天

朝來氣分大に爽快となり田口君上中君と共に甲板上を三回ばかり廻つて運動したが一廻りが一町ばかりあるとのことゆゑ三町歩行了た譯である夫れから甲板上の椅子で讀書して終日過した夜に入り相撲の餘興があ

り暫く見物して後浴を取り寢に就いた。

二十三日 晴天 日曜日

氣分益々良好で平常(陸上)と少しも違ひを覺えず午前十時から耶蘇の説教が始まる自分も参列したが言語が不通で「チンブンカン」なれども其形式文を見學した此日午後一時何分かに經度西半球に入る夫れから緯度も熱帯へ入り掛ると云ふ此船行は日日東へ向いて進行しつゝある故に毎朝三十分ばかり時計を進め桑港迄に一日の差が出来るから明廿四日を矢張り廿三日として日曜日が兩日ある筈なのだ。

太平洋上偶成

極目蒼茫入暝煙 天連水處水連天 晚來殊覺胸襟爽 百尺檣頭片月懸

同

太平洋上不知程 任浪舟中睡自成 但覺此身如列子 冷然亦御海風行
後二十三日 晴天

此日晝間記すべきこともなく運動もすれば讀書もする室に入るかと思へば又甲板上の椅子にも往く終日暢氣に過した夜に入り二等客の甲板で日本芝居の催しがあり自分も見物に出かけた役者は皆船員であるが藝人跣足と云ふ有様で善く演ぜられた就中所作事の墨染の如きは尤も優れた出来であつた。

二十四日 晴天

熱帯に入りし徵候だと人は云ふが晴天であるに拘はらず忽ち浮雲一片出るかと思ふと沛然として驟雨到來し又忽ちにして止む夫故に水天一碧で何物も見ざるに或部分丈濛々として咫尺を辨せざる處もある是れは驟

雨の降つて居る處だとか云ふ随つて氣候も餘程暑氣が加はり袷に單羽織で丁度身に適する程度になつた午後には船客の遊戯もあり中々若き婦人方や子供衆も活潑で面白く見受けられた此日風強く白浪湧き立つを見れども船に慣れたせいも別段氣分にも障らず散歩もすれば籐椅子で居睡りすることもある此夜一等食堂では活動寫眞の催しがあり二等食堂では落語に三味線と尺八の合奏が催され自分は二等食堂へ見物に往つたが皆船員の隠藝で藝人跣足の名手のみで面白かつた。

二十五日 晴天

最早明日は布哇へ到着の豫定なので船中の客人老若男女を問はず皆々楽しんで居る此日から暑氣が次第に加はつて所詮袷を着て居られず單衣を出して襦袢も肌着のみとなつて羽織を引掛けるも暑苦しく感じた此夜

日本活動寫眞があり日本華族の御家騒動の映畫であつたが外人の目からは何と感じたか自分達が西洋の映畫を見るのと其差如何などと一人で心に問うたり答へたりして見物して居つた此日晚餐の時に船客の有志は假装をして食堂へ入り込んだ夫れは此夜バーンダンスの催しがある爲めだつた此バーンダンスは日本語で云へば乞食の様な破れた着物ですると云ふ意味だとか中々眞似の出来ない様な變つた服装で行列をして食堂へ練り込んだ時には皆喝采をしてやんや／＼であつた其中で趣向の好きものには景品を出すと云ふ騒ぎ食事後は其姿の儘で舞踊をして實に盛で面白かつた。明朝は布哇へ上陸してホノルル市街や名所舊蹟を一見せばやと夫れを楽しみに室内を片付け早々鍵をかけて出る準備を此夜の中になして寢に就いた。

二十六日 快晴

今朝は上陸をする積りだから例よりも早く床を離れ同室の婦人も同様に夫れく身仕度をする自分は緋の單衣に靴袴と云ふイデタチで仕度も出来たが食事時間に間があるから舷頭に出た早朝から布哇の嶋が見え初めて居つたのを仕度中で望む暇も無かつたがサア甲板へ上つて見れば成程一週間ばかり一點の嶋も見ず一碧の海が天に接するのを毎日く眺めて居つたのに俄かに美麗なる山が眼前に現出して來るので實に何とも言へぬ嬉しみを感じた此布哇は風光明媚で流石熱帶地方丈あつて草木の状か異つて居る此朝は朝食も三十分ばかり早く済み引續いて健康診断があつて船客一同食堂に集つて居る別段人々検査をすると云ふ譯ではなく食堂の出口に検査官が立つて皆々の様子を見る丈で特に病人らしき人を點

一〇

檢する迄のことであつた夫れが済んで船を出る事になつた自分共一行は大阪の實業家阿部氏父子此方とは食堂で同じ卓上に食事を共にして御馴染となつた我々三人都合五人で一自働車に乗り他の一臺は鐵道院の服部君美濃の矢橋君外二人の紳士である棧橋を出ると無數の自働車は我もくと客を呼ぶ田口君は先達となり日本人の運轉手を雇ひ二臺打揃うて走り出す第一に馳せ付けたのが水族館である車上にて四方を見渡せば何から何まで熱帶國のこととて趣が異ふ松の樹からココアの木椰子何々と名稱は種々様々で中々記憶が出來ぬ夫れに紅白紫黃と變つた草花がやなみべたおしの姿で實に樂天地と思はれた。

偶感

蕉林椰樹綠蔥々 到處閑花百間紅 眼界一新殊有趣 輕車逐景拂薰風

一一

水族館の規模は極めて小さなもので、入口に金魚、鯉など日本の川魚が泳いで居る夫より奥に至ると、兩側に海魚の數々、幾十種類も泳いで居るが、皆異様の美しくしき魚のみである。庭園は箱庭的に造つてあると云ふのでなく、鬱々と繁茂して居る樹木の下が涼しく、好い心持である。此處を辭して又車に乗り走り出す此度の見物する處は「バリ」と云ふ布哇第一の絶勝地で、二百年前の古戰場とかや此國の道路は日本人の眼から見れば驚く程に立派で皆アスファルト舗だ如何なる山へ登つても同様で、東京で自働車に乗ると其乗心地は雲泥の差がある。古戰場へ行く道は山の中腹を廻り、登つて行く我國の函根の湯本から塔の澤を経て宮の下へ登つて行く程に、峻しくはない夫れも其筈だ大體に於て函根より何百尺も低い山だから、路傍には松檜鬱々と繁り、又名も知らぬ珍木奇草の間を縫ひ登つて其絶景の「バ

リ」に着た此處は奇巖絶壁の頂を少し削取つて地均しした程の位置で、前面は眼下百丈もあらんかと思はれる懸崖で、此れより見下せば日本人の農村點々として散在し、「バイナップル」の畠が整然と耕作されてある。其農村の遙か向ふを見渡せば、男浪女浪とよせてはかへず海岸の突出した處や入り込だ處、又中洲になつてある處も、一眸の中に萃められ、且つ十里の海波、各其色を異にし、紺や淺黄又は瑠璃に黄色と漣を打つて居る所は、實に美觀で、名工と雖も描き得ぬ風景である。又後面絶壁の下に古戰場の碑が岩石に彫刻されてある。左の方は嵯峨たる巨巖屹立し、遙かに要塞の在る峰岳をも見渡すことが出来て、拙い筆には書き盡すことは不可能で、これは「く」とばかり花の吉野山とも言ふべき景色哉である。夫れから此處に名残を惜しみつゝ、來路とは反對の道を下り、「ダイヤモンドヘッド」と云ふ布哇要塞の軍隊が屯す

る兵營や將校の住居や練兵する處などを右或は左に眺めて車上で皆々と話し合つたが日本では軍縮々々と喧しく唱へて居るが何のことだ此處は益々軍備擴張ではないか杯と語り合ふ内に下り／＼て海岸に出で望月と云ふ日本料理店へ入つた此店は海岸の風雅で閑靜で日本座敷三間打通しの縁側付と云ふ御誂向き同勢九人打寛ぎ豫め命じて置いたことなれば〔電話〕テーブルも準備なり、ゴモク皿、青菜の胡麻あへ、白味噌汁に豆腐の賽の目、鶏肉甘煮、鹽焼肴、鮪刺身が出て、ビールに、サイダ、後は御茶漬と云ふ純日本式なので日本食に餓ゑて居た連中久々で飽食した食後海岸の庭園樹木の下を散歩して一抱へもある、ココアの樹を何本あるかと數へたりした此幹は亭々と聳え葉は椰子の如く蕉に似て其實は圓形で棕櫚の木の如く葉下に花あり花の下に幾箇となく實つて居る、ココアは此實から採取するとのこ

と遂に何十本あつたか數へきれなかつた尤も海岸と雖も灣中深く入り込んだ處ゆゑ恰も湖水の如く又池水の感がある海岸樹下に小亭があり小舟に棹さし或は海水浴の時には此亭を使用するとかいふ此處を辭して又車上の人と爲り今回は市街、ホノルルの直ぐ上の丘（バンチホール）に上る此道も坦々たる、アスファルトを舗きつめた道路を自働車で登る殊に熱帯地方の特色とでも云ふか路傍の山の中に天然に霸王樹の大なるが野生して居るには驚いた此れは餘り圖の宜くないもので恰も杓子を重ね／＼て立てた様で何となく卒塔婆でも立てた様で心持悪しなど云ひながら通行した此丘は市街を眼下に見下す絶景の處で町を自働車が幾十臺となく馳走して行くのが子供の遊戯品の自働車の如く手に取る様に見え又人畜は豆か蟻かの如くに見えて居る眼を轉じて遠く眺むれば、ホノル、灣口より外海

の洋々たる有様實に雄壯廣大の景色をも一瞬に萃めて飽觀した此處を下りて此地の名産たる砂糖の製造所見物に出掛る此製糖所は市街の外端の田舎で道すがら兩側の農作物を見るに皆甘蔗のみで誠に無雜作に繁茂して居る或處は農夫が今將に刈り取らんとして居る處もあれば既に刈つた根より盛に新芽が出て居り又青葉黃葉繁茂して見渡す限り甘蔗島ならざるはなしで此地の地味や溫度が如何に此作物に適し居るかが知られる其他到る處「バイナップル」の島に「バナナ」の島など日本内地には所詮見られぬ製糖所に著いて莊大なる器械を据付けてある工場を廻り廻つて見物しながら斯く大なる製造場なるに拘はらず職工の僅少なには同行の方々が感心された如此器械力を利用し人力を省略してあることは日本では中々眞似の出来ないこと第一着に甘蔗を無雜作に積上て之を碎く處から終には

皓雪を擬ふ白糖と化して出て來るには自分如き無智の者には驚かざるを得ない其上燃料に石炭を用ひずして其殻を使用するから自然安價に出來上るのだ布哇の富源も此れが一原因と云ふべしである布哇見物も完了で船場近くで互に離散し自分は船に歸り(上中君と共に)夕食を取つた是日午前十時から午後五時迄車に乗りつめたから多少疲勞も加はつて居り床には入つたが此夜は碇泊中で船の進行が無い爲め其蒸暑いことは驚くべく容易に夢路を辿ることも出來ず同室の婦人も同様の有様で互に寢返りばかり打つて深夜漸く眠に入つた。

二十七日 晴天

今朝は布哇を出帆するのだと思ひ三十分ばかり早く起き朝食前に甲板上へ出た折柄田口君歸り來られ昨夜は望月で夕食に牛の鋤焼を食し海岸

「ホテル」で矢橋君と共に一泊して已に朝食後だと元氣旺盛であつた船は汽笛を鳴して出帆の準備をする甲板上にて下方の海面を見下ろせば土人が幾人か船の周圍に游泳して甲板上から客が銀貨を投けると海底へ潜り銀貨を探して口の中に入置き直に海面へ浮上る各人一箇の銀貨を競争して潜り込み探し取る中々巧妙な働振りで面白い或は船の一番上に「ボート」が備付けてある其上から十間許もある海中へ飛込みく丸で河童の子の様な様にして此土人は日本人に似て茅ヶ崎あたりの漁民の子供と大差が無い離れ港口を指して一回轉する夫れには小汽船が曳船して方向を港口へ向けさせる夫れから大洋丸自身が動き出すのだ何分狭い港内のことだから一萬八千噸と云ふ大廈高樓の様な大洋丸では小動きが付かぬと云ふこと

であつた兎角する内に港口を出て沖合遙かに走り出した布哇の名残も盡きせぬ心地して丘岳の青き港の屈曲町々の家屋の次第々々に小さく成り行くに暫し舷頭に佇み又は左舷右舷と徘徊して其景色に憧憬したが半時一時と経過する中に霞と共に消え失せて亦海天一碧の空漠たる眺めに歸してしまつた此日午後は別段記すべきこともなく飽食安眠。

二十八日 晴天

朝食後三四回甲板上を散歩したが碧紺の海を見るのみで夜は八時半から西洋活動寫眞の催しがあつて自分は此船に乗つてから始めて見物した坐の隣りに田口君上中君も見て居られ田口君に折々説明を伺つて演影の趣意も分り面白く亦情に迫り涙の催す所もあつた。

二十九日 快晴

此朝は平常より早く眼が覺めた風呂に入り衣類も更めたが食事に餘程まだ時間があるから甲板上へ出て三回運動をしたが早いゆゑ未だ一兩人しか出て來ず誠に静かであつた午後には船客の有志で綱引等の餘興が甲板上で催され暫時見物し室に入り野の花と云ふ小説を読みかけた此日追々と冷氣加はり單物に長襦袢を着た夜に入り「ダンス」の催しあれども自分は見物に往かず寢臺上で書見に耽り竟に寢に入つた。

三十日 晴天 日曜

今朝は昨朝より寢坊したので入浴更衣で直ぐと朝餐となつた午前中二三回甲板上を廻りしのみで後は小説に耽る今日は朝説教があつたが前週に參列したゆゑ今日は缺席した午後は日曜日ゆゑ何の催しもなく夫故又小説を相手として半日を消した。

五月一日 曇天後晴

夜來輕雨ありしが朝來曇晴れ雨止む朝餐前に甲板上を三四回運動して後食堂に入つた午前中は甲板上の椅子で柳川庄八の講談本を読み又荷物の整理をした是れは明後三日には最早上陸が出来るから其爲めに用意するのである思へば船居も長い様で経過して見れば又残り惜しき心持もする。

二日 曇天

此日は兼々聞及んだ通り桑港着の前日とて寒氣も加はり船の動搖も甚しくなつた恰度日本近海の荒れるのと同じだと云ふことで寒氣の加はるは潮流の関係だとか云ふ昨日荷物の片付を済して置いたゆゑに小説を讀んで寢轉んで居つた晝食も食堂へ出たが少量に控へて置いた晚餐の時に

は食堂で御名残の催しがあつて先日來種々の餘興があつた勝負の賞品授與があり船長の演述もあつて中々盛大であつた。

三日 晴天

早朝五時半目を覺し出立の仕度も出來て三十分ばかり早く朝食となり食後検査があり喫煙室で旅行券の查べがあつた夫れ是れして十一時頃となつた船を出て之から荷物を集めて税關の検査を乞はねばならぬ夫れが濟まねば一步も市中へ出さぬ然るに上中田口自分と三人の荷物を頭字で區別し運搬人が持つて來る兩君共に検査が濟んだがさて自分の船室は餘程奥の方ゆる運搬が遅れて検査も跡廻しとなつて兩君へ御迷惑を懸けたが検査も無事に濟んで大荷物は運送屋へ依托して宿迄届けさせ小荷物は人と共に自動車で「フエヤモンドホテル」へと走つた桑港の市街は前は海に

面し後は小高い山であつたのを切り開いて市街を作つて居る故に町は坂路ばかりである夫れにも拘はらず道路の好きこと驚くばかりで先日布哇を見物して今又桑港へ來て見れば猶一段其の上である「フエヤモンドホテル」は桑港第一の旅館で「フエヤモンド」とは美麗なる山と云ふ意味だとか成程其位置は高臺で眞下に市街が縦横に展開し街を隔て、桑港灣に臨み左方に高丘あり大厦高樓巍然として聳え正面灣内に小嶋が浮ぶ嶋を隔て、岬端突出し右方は廣き灣をなす灣内には無數の小蒸氣船汽笛聲絶間なく往復繁く又陸上市街には自動車電車蜘蛛の絲を曳くが如く頻繁と往來す流石は米國東岸要港の概況を一眸に見下す旅館の價値も亦大なりと謂ふべし此日彼是して三時近くに延引ながら「ホテル」の晝食にあり付き自分は休憩したが田口君は友人と市街へ買物に行かれて夕景頃歸宿せられた夜

は晚餐後早く寝に就いた。

四日 快晴

早朝目を覺したが再び夢路に入り八時頃食堂へ出て朝食を済ませ十時頃から桑港見物に出掛けた田口君の友人矢橋君の知己で當地に十數年間居住して居らるゝ某君が案内者として自動車で迎ひに來られた先づ午前中第一番に馳付けたのは此地の兵隊屋敷で其營門の内を自動車で縦横自在に馳廻り見物する(日本なれば外國人がそんな真似すれば大變な騒ぎだ)此處の海岸に沿うた小高い丘の中腹もあれば低い處もあり砲臺も備へられ練兵場や演習砲臺や士官の官舎や集會所もあり中々軍國主義を發揮して居る此處を見物して今度は一個人の經營に成る屋内游泳處を見物した先づ其附屬参考室では兩側に此地の開拓以前の人種インディアン時代の製

作品や海産物や人間の「ミイラ」杯總て古代品のみの陳列があり此陳列を見物して階段を幾段も下降すると四十間に二十間もあるかと思ふ玻璃天井の一大屋と連接す此下方十間ばかりの處に海水浴場を幾個にも區分して男女子供が盛に游泳して飛込むもあれば潜込むもあり其傍には衣服の脱ぎ場等夫々の設備は整つて居る此浴場は幾分温度を加へて潮流が自由に出入する仕掛けになつて居る又見物所は上段より下層迄幾段となく椅子を列べ棧敷に出來て居る此れは游泳の競争或は水中諸藝のある時に用ひる棧敷だとかいふ此一廓に入ると恰も熱帯に在る心地で即ち上より太陽の直射し下には溫潮の蒸發する爲めとのことであつた此頃日本人は入場は差支ないが游泳は禁ぜられて居ること此れも排日熱の一種ならんかと思つた此處を出て左方へ向へば一帶に海岸續きで屋内泳場の前面に

當つて、おつとせい岩と云ふのがある此岩は海岸より十間乃至二十間許の間に三箇離れて海面に突出して居る此岩のある箇所が「オットセイ」の集合所で自分の觀た所では約五十疋ばかりが岩の上にウヂョ〜と寝轉んで居り又或は海へ入り或は岩に攀ぢ登る等千態萬狀で其近傍一帶に浮きつ沈みつして游泳して居る有様實に臍の緒切つてから始めての觀物であつた此岩石を一瞬の下に見降す小高い處を「ハウス」と云ふ斷崖絶壁の上に鐵橋で危険を豫防してあつて「ベンチ」を備へ觀覽に便ならしめてある爰より左方は灣入して次第々々に低く竟に平沙となる此處に鐵製の棧橋を海中に突出してある夏季の海水浴場とのことで海岸に面した通は種々の賣店軒を並べて浴客の便を圖つて居る。

見物終り車を飛したのは當地の有名なる金門公園である其規模の廣大

なることは一見した位では一寸方角もつかないされども別に是といふ珍奇なこともなく記するに足るべき程でもない公園を去り市内に入り常盤園と云ふ日本料理店に入り晝餐を攝つたが料理は中々上等で布哇の望月より遙かに上手だつた一同舌鼓を打つて賞味した食後に日本式の「カシハ」餅を出した日本を出發してから箇入の菓子は始めてなので殊更に旨く感じた思へば明日は端午のお節句だと云ふ外國の空に住んでも日本の節句をすと思へば何やら懐かしみを感じる食後は一同「ホテル」へ引揚けた。

晚餐後「ブラン」市内を散歩に出掛け下町に行つたさながら不夜城の心地せられ今から紐育や華府などの繁昌さが思ひやられる一巡して歸宿就寢した。

五日 晴天

朝食を済ませ隣室の森嶋守人君夫妻を訪ふ森嶋夫人は今回自分と同船で在華府夫君の處へ赴かるゝ筈で圖らず船中にて初對面の挨拶を交したが守人君は其學生時代から見性會の道友であつたが外交官に任命されて以來華府在勤で今度夫人を迎への爲め桑港迄出張されたのと前日來同宿なりしも互に方向違ひに活動したゆゑ面晤の機を失ひ出立前匆々互に再會を約して分袖した自分達は午前十時旅宿を出立して「シカゴ」行汽車に乗るべく自動車で舟渡場迄馳付け渡船に乗り込む船中で矢橋君「レンズ」を向けられた船より上り十一時半汽車に乗込む之より五日間汽車中の人となつた汽車に乗込んだ一行は「シカゴ」迄四人連即ち上中田口矢橋と自分とである汽車の速力は日本の最大急行よりも遙かに速い爲め自然動搖も甚しく何かに攫まらねば所詮歩行困難である夫れ故に船へ乗りたての時の様

な氣分になるかと心竊に不安を感じたが別段船暈の様な感じもなく次第に慣れて來て食事杯も進み勝ち且つ氣分も輕快で車窓外の景色を眺めるに忙がしい位である。

偶 感

草木山川異故郷 車窓南北轉眸忙 杏桃百里花間路 種々禽聲慰客腸
午後二時加州櫻府(カリホルニア州、サクラメント)に着した此地は大河に沿ひ水運の便宜しく繁華の土地である桑港より僅に四五時間を走つて此地方へ來ると急に暑氣甚しくなり袷衣に單羽織で流汗ダラ／＼暑い／＼と云ひながら五時頃に至り加州金礦所在地の「カリホルニア」の金の里と云ふ山脈にさしかゝる此日夕方に至り暑氣は中々減ぜず夫れも其筈だ櫻府附近での暑氣が鐵車に焼き込みし故なりとかや夫故に停車場へ著く毎に

五分乃至十分の停車中は乗客は車外へ總出で涼を取る次第々々に山脈に入り海拔何千尺の處か所々に積雪の斑々たるを見た夫れより山又山を走り谿間に無數の枯木が倒れ横はる處もあれば枯れ果てた大木が此處彼處に立ち其間には蒼々たる樹木も交つて居て何時の時代に斧鉞を入れたのかと疑はれる尤も人に聞けば此有様は山火事の跡だとか見るから凄涼たる景色である程なく五時四十分に「キャニオン」(峽と譯す)に著いた五分間停車して一般乗室に下車を許して風光を賞覽させる此峽は前面の山は海拔二千尺ありて所々に白雪點々と見え谿谷の深さ五十尺で見上げ見下す其景狀の雄大なことは日本の箱根碓氷杯の比ではない其谷底を流れる溪水が僅四五尺の幅にしか見えぬが實際夫れが五十尺の川幅で百尺の處もあると云ふに至つては意外の感に撲たれざるを得ぬ此處を發車して山又山

を登つて車は奔る六時過には冬期の雪覆の内を通過する其間中々長い何町あるか随分不愉快である此を過ぎて山中に一小停車場があり此附近一帶に宿雪皚々とも形容すべきか何月頃に消えるのか或は一年中消えたと思へば亦降るのか不明である斯くて夜九時半には加州を越えて「ネバタ州」(ネノ市)に着した此地は離婚で有名なる處で離婚希望の人は此市で裁判に係れば直ぐと希望通になるとのことである此日朝來窓外の風光に憧憬し眼も疲れ「ネノ市」へ著いた頃は寢臺中の人となつて夢路を辿つて居つた。

六日 晴

五時半目を覺し床を拂ひ車窓より見渡せば昨日と異り一面涯も無き曠野で茶褐色の草叢が見渡す限り茂つて居て實に不愉快の念を生じた之れを「セイジフラシ」と云ふ殊に黃塵萬丈の有様に二重の車窓を滲透して入り

込み來るには閉口した早朝目を覺してから半日ばかりも同様の景色を見續けて行つたが遙かに雪を頂いた山が見え出した時には幾分心持を直した。

偶感

四野茫茫色似灰 黃沙千里鬪纖埃 車窓忽喜平蕪外 戴雪連山入眼來
次第々々に登り海拔四千八百尺以上の高地に一村ありしが此處を通過すると草叢は變じて白黄色の沙漠となつた其中を六十哩ばかり走る其間眼がキラ／＼として痛さを感じる是れは鹹湖の乾燥したる處と云ふ次第に湖面に近づいて來た此湖はソールトレーキで鹹湖である普通の湖水よりは餘程辛く百五哩の大湖なれども舟一つも見えず魚蝦の影だになし夫れも其筈である四邊は赭山同様の茶褐色の草叢ばかりの低き山々で舟楫

も不用の譯だ斯の如き未開の土地や湖水を汽車が貫通して走る様にする土工事業の困難さは今より其當時を思遣られて眺望がないの眼が痛むなぞと言ふ小言を云ふも勿體ないことである聽て汽車は其湖水を貫通して走る其岸に近き處は車道丈け埋め立て、あるが次第に湖中に進入しては橋梁となる其橋長の三十哩あるには驚いた。

偶感

鹹湖苦味欠魚蝦 一望水天無物遮 橫斷長橋三十里 蜿蜒終日走嚴車
此橋を通過し程無く「タクデン」に着したのは午後一時五分であつたが此處から時間が更つた唯今迄は太平洋時間であつたが山の時間に變更せられ二時廿五分となつた此「タクデン」より一時間ばかりの距離に「ユーダ州」ソールトレーキ市あり「モルモン」宗の本山の所在地八十年前の寺院が在る由

此宗旨は多妻宗で有名であるが残念なことには下車して見物に行く時間の餘裕もなくて發車した夫れより窓外の風色も見るべきものなく五時半頃より次第に山となりしが皆緒山のみにて一物として目を慰める物もなく車は奔り奔つて又高原へ出た此處は「ワイオミン」州の曠泉とかにて午前に過ぎた所と大差なく灰色の草叢のみなれども所々に濁流の帯の如くクネリ／＼流れる丈け車窓内へ黄塵の滲入することを免かれた様に感ずる又此水流の附近は自然に高低あり皆牧場となつて居る夫れ故牛馬羊の群を爲して此處彼處に徘徊するを目撃した程なく夕餐を済ませ睡郷に入つた。

七日 晴

午前五時半起床 夜來夢の裡に落機山を通過して今朝車窓より見渡せ

ば折柄「シエエン」停車場に著いた十五分で發車した沿道一帶芝原の如く見渡す限り曠漠として昨日の午後見し所と大差なく牛馬の群を爲して水草を逐ふあるのみ次第に一方は丘陵となつても依然牧場のみなり時に浮雲出て曇天となる九時半「ネブラスタ」州「ジュールスハーグ」に著し十一時半に「ノートスヘク」に著いて十分停車した此地は中々宏大な市街であつた故折角下車して其邊を散歩せんとしたが雨が「ポツ／＼」降り出した爲め匆匆にして車内に入つた午後に至ると風景は次第に宜しくなり見渡す限り青蒼として林もあれば人家もあり梨の花盛の處も通過した。

芳草連天綠莫涯 白川如帶繞山斜 翠陰深處人家在 門繫輕車庭綵花
午後七時頃に「ネブラスタ」州「チャマハ」市に著く此處は「シカゴ」に次ぐ繁昌なる都會となれども見物も出來ず又寢臺上の人となつた。

八日 晴天

三六

午前六時起床 今朝は九時に「シカゴ」に著く豫定ゆゑに乗換へせずばならずと手荷物も夫々取片付け九時を待つて居たが中々「シカゴ」へは來らず其間景色の美なる處もあれども殊更に記する程でもなく一時半遅延して十時半に漸く著いた前日來の豫定では紐育行き發車時間は十二時四十分なれば三時間餘の待つ時間に自働車で市内を一巡見物する積りなのが延着にて其計畫も御流れとなり直に此停車場に自働車で馳付け(東京の新橋と上野驛の如し)手荷物全部赤帽に渡し切符や寢臺券は田口君が萬事周旋せられ先づ一と安心併しながら發車時間迄一時間餘あれば夫れを利用し「ミシガン湖畔の」コンダレスホテルに投じ一部屋を借り三人代るべく入浴し桑港以來の塵垢を一洗して心身共に爽快となり又輕車を馳せて汽の便

車の人となつた。

旅館偶感

車行日日苦煤塵 客館投來暫逸身 浴後樓頭立回首 且看湖景渺無垠
今一夜を車中で明かせば明日は紐育著のことなれば心中の嬉しさは何に譬へん殊に「シカゴホテル」へは高峰から二通の電信が來て居り無事の旅行を祈るのと自分丈は紐育に著くと直ぐ兄上の家に來いと通信であつた嚙や病兄の吾を待ち詫び玉ふらん杯と思へば一夜か千秋の思で何とも言へぬ嬉しさと又病狀如何の心配とが交々湧いて來た去りながら此の長途の旅中明き盲同様の自分を保護同伴して遙々紐育迄も連れ來り玉ひし田口上中兩君に明日は袂を別ち別々の處に起居するかと思へば盲者が杖を失ふ心地である殊に兄の家では家族中病兄のみ言語は通するが他は皆

三七

日本語に不通なりと思へば悲喜交々至つて何とも言へぬ感じがした併しながら出發前から豫め覺悟のことなれば其時は其時と淘宮術で毎々御示を伺うて居る、今爰と云ふ一著子を守り取越苦勞は一掃した汽車に入るや直と食堂に往き午餐を攝るべく料理の注文をする内に一聲の汽笛と共に發車したが食事を濟ませて室に歸り窓外の風光を眺むれば農村が続いて耕作も行届き樹林あり畠あり中々景色は麗しく桃杏の花は白紅を交へ處によつては桃花既に散じて梨花雪を新にすると云ふ有様である斯様な狀景が続いて居る内に六時前後より、イリー湖の畔に沿ひ車は奔つた此處江村連續して如何にも詩的の景致に富めども拙き筆には盡し難く頻りに古人の句を思ひ浮み城南春色濃於酒醉殺千林桃杏花や兩株紅杏疎籬外、知是湖村賣酒家などは、此處に適合すると思つた七時半頃、クリーブランド市に

著いた此の地は米國十大市中に加へられる最繁盛な一都會で此の市は自働車製造所の大なる會社が在ると云ふが聞いたばかりで此處を發車した明朝九時四十分紐育著の豫定なので此夜は例より早く寢に就いた。

九日 晴

六時起床 衣類を更へ荷物の整理する内に汽車は容赦なく進行を續け頓て、ハドソン河畔に出て流に沿うて左岸の堤上を走る。

偶 感

不管山川景色妍 一憂一喜思紛然 奔輪於我猶疑駐 魂騁家兄病臥邊
對岸の青山相續き次第々々に都會近くなるに従ひ丘陵の中腹に別莊式の家屋や病院や兵隊屋敷など實に人目を喜ばす又河中には嶋嶼の往復も次第に頻繁となる紐育近くなると機關は一寸停車の間に取換へられ電

氣機關となり地下線に入り遂に豫定通り午前九時四十分紐育停車場に安着した高峰家より襄吉、孝の兩夫婦を始め事務所及研究所員の方々自分一行を出迎へられ一々握手を交へ田口上中兩君と一時袂を分ち自分は襄吉夫婦と自動車に同乗して紐育郊外「ニュージャージー州」バセークの高峰邸に入つた。

歸 途

大正十一年七月三十一日 晴

此日愈々北米合衆國の繁榮を極むる大都會の紐育を後に名残を惜みつつ茜さす我日の本へ歸るべく午後八時の汽車で高峰一家の人々即ち敬愛する姉上や甥の襄吉、孝の兩夫婦及近親の方々と袂を分つことにした。此
 前日三十日の午前に「バセーク」なる高峰邸を出立し姉上や襄吉、孝の兩夫人等と自動車に同乗して是迄自分を毎日か隔日紐育の病院へ乗せて呉られた山中君に運轉して貰ひ見慣れた一直線の道路や橋梁や船渡杯を通過して紐育停車場の隣なる二十階も聳立する「コモト、ホテル」に落付き取敢へず田口君の部屋に陣取つた皆と一卓にて晝餐を共にし夫より一同にて亡

兄上の塋域たる紐育市外、ウッドロンに自動車を馳付けた此塋域内の一大宏館内に亡兄の靈柩は安置せられてあれば銘々美麗なる生花を捧げ禮拜する今や自分は靈柩前に瞑目默拜する刹那これが最後の永訣かと感慨無量腸を寸断する思で熱涙袖を絞り暫しは頭を擧げることとも不可能であつた夫れで自分の秘藏の念珠を孝夫人、エセル君に托し毎月兄上の命日に此暮地へ參詣に來られる時には必ず此念珠を手にして自分に代つて亡兄上に拜をなして玉はることを堅く約束して後髪を引かるゝ思で一同と共に「ホテル」に引返した此夜は姉上の好意で自分一人で「ホテル」の一室に起臥しては何か不便ゆゑ孝夫人を遣はし同室で一泊さして下される都合であつたが孝氏夫妻の發意で一夜を「ホテル」で明すよりは「ジャマイカ」の同氏邸へ四人連で（田口、自分、夫妻）之から行き一夜を話し明さうではないかと相談

一決し孝氏の自動車に乗り同氏が運轉して車を飛した聽て同邸に著くと表口裏口共に錠を卸して人一人も居らず裏口より鍵を開けて入り二人の下女は主人の不在中用達に行つた夫れは豫て主人の許可を得てあるのだ四人して夕食の用意をすることにした先づ孝君が牛肉を切る田口君が電気ストーブで御飯を炊く妻君は裏庭から葱を採つて來る自分は之を洗ひ切り鋤燒鍋に入れて鹽梅をして煮る此間に妻君食堂の仕度を爲し一同卓に付き舌鼓を打ち自炊の面白味に興を添へ此夜は過去や行末の物語に夜の闌けるを知らず深更に至り皆々床に入り夢路を辿る

翌三十一日午前中に孝君田口君同乗して紐育へと自動車を馳せられた自分は高峰邸に三箇月足らず滞在せしが邸を出るには必ず運轉手は山中君と極まり紐育の電車や地下鐵道に未だ乗つたことがない高峰事務所も

未だ知らぬ夫故孝夫人「エセル」君に案内して貰ふことにして晝食後雇自働車に乗り途中下車して市内廿六丁目邊から地下線の車に乗り「ウォール」街にて上り「エクイテブル」ビルヂングなる高峰事務所に入り西尾氏其隣接の興東貿易事務所の草延氏及其他の人々に面會し今夕出立の暇乞して其近傍五十餘階の建築に上り市街全景を見下し「ハドソン」河の流の景色やら市街建築の有様や大都會の繁華の狀況を一眸に聚めて飽觀し夫れより歸路は市街タクシー自働車で「ホテル」に歸著した「エセル」君の懇切なる温情には感謝に辭なし晚餐には上中君、西尾君孝夫妻田口自分六人車を圍み談話盡きず時刻を計り停車場に行く見送の方々は姉上始め襄吉、孝の兩夫婦を始め上中、西尾、大河内氏等と惜しき袂を分ち車中の人となつた發車後直に寢臺の用意を命じ床上に横はれども中々安眠は出來ず亡兄の世に在し、時

のことども想出し今昔の感に撲たれて益々神経が興奮し遂に深更迄眠り得ず黎明僅かに眠に就いた。

八月一日 晴

午前七時起床 窓外の景色記する程の事もなく九時半に「パフハロー」市に著いたが中々發車せず二時間停車し漸くのことと動き出した實は當時米國にて鐵道従業員の同盟罷業所謂「ストライキ」が始りかけて居るとの報があつたので自分達は八月十日「バンクーバー」出帆の「エンブレス、オブアジア」號に乗込む豫定なれば十分時日はあるが萬一途中「ストライキ」の爲めに汽車の進行不可能に陥らんも計られずとの思慮から二三日出發を早めた次第なのである果せる哉第二日目に罷業の影響を受け空しく停車の已むなきに至つた此處を發車して三十分で「ナイヤガラ」停車場に着いた時に十二

時であつた、ナイヤガラで一泊して緩々名所の見物をもしたが何時汽車運轉の中止とならぬも計られず夫れ故少しも早く合衆國の領土を越えて英領カナダへ赴けば此危険は免るべしと田口君の言はれるに任せ停車場で瀑布案内の自働車に乗り見物に出掛けた流石世界に冠たる名高い此瀑布所詮拙き筆では形容せられない、嗚呼ナイヤガラ、ナイヤガラと瀧見哉、で迎も雄壯偉大なる其状は見る人ぞ知るとでも云ふの外はない唐の李太白は廬山の瀑布を形容して飛流直下三千尺疑是銀河落九天、と吟じて居るが我國日光の華嚴瀧と孰れか優孰れか劣かは知らねども浩漾たる大河が幾流も並列して千丈の峭壁より落下する所は華嚴杯と比較にならぬ自分共は第一に見物した處は瀑布の上流の河に沿うて樹木の鬱蒼たる道路を迂回して千丈もあるかと思ふ絶壁の上に出た此鬱蒼たる處が某島と云つて

大河を二分した中間の島嶼なのである其島端斷崖の左右から春雷の吼ゆるが如き響をなして奈落のどん底かと思ふ深みへ落下する其水煙が濛々と天に沖する其勢の凄まじいこと實に言語を絶する位である此邊を右往左往して所謂瀑布の上方から瞰下したのである夫れから車に乗り瀑布の下流の河に架してある長い鐵橋の上で車を停め飛瀑を望めば其全景を展開して又一段の趣がある又瀑壺の傍近く迄降下する事も出来る其處へ往くのは河岸より絶壁の岩石に鐵橋で危険を防ぎ次第に流域に降下する徑路がある見物する人々は頭部より全身、レインコート様の物を被り水煙濛々咫尺を辨ぜざる中を潜り瀑布を見上げるのである自分共は汽車の時間の都合で降下を見合せて橋上より其見物人を瞰下して橋を渡り對岸の瀧見茶屋で飽觀した此處の景は又格別で瀑布が三面より墜下する右方は加

奈太の瀑で左方の二つが合衆國の分だと云ふ夫より下流の對岸に沿ひ四五丁走ると兩岸の斷崖が次第に狹隘と爲り急湍激流益々加はる此處で車を捨て徒歩して斷崖の小徑を辿り次第に降下して狂瀾激蓋する流の畔に出た急湍岩石に觸れ奔騰珠を跳らし覺えず奇と呼び快と叫ばしめた此見物中滑稽なる一話がある元來合衆國は禁酒國なれば「ビール」にも「アルコール」の制限があり日本杯の品質に比すれば何分の一しか「アルコール」の存在を認めず随つて飲んでも飲んだ氣がしないと時々耳にした然る處「ナイヤガラ」の橋を渡ると英領加奈太なるが故に忽ち「アルコール」の濃厚なる「ビール」が飲める田口君も早速此小徑の一店舗で「ビール」の立飲に肉の腸詰の「サンドイッチ」をバク付き自分も御相伴して兩人意氣揚々と車に乗り停車場へと歸り二時十五分發の汽車に十分間に合ひ「ウエーランド」に向け發車

した既にして「ウエーランド」停車場へ下車して「トロント」行の汽車に乗換をなすのである此停車場田舎の小停車場で待合室とても名ばかりの狹隘不潔なので手荷物に腰を卸す程であるが偕何時迄待つても汽車が來ないそこで「ストライキ」として汽車がおくれ乗換人は「あくびだら〜」といふ狂句が出來た漸くのこと乗車して「セリサイヅ」驛を過ぎ六時半頃より「オンタリオ」湖畔を走り夕陽の湖水に映する美景を眺めて七時「トロント」市に著き直に「キング・エドワード・ホテル」に投じて一泊した

「トロント」は「オンタリオ」州廳の所在地で繁昌なる一都市である「オンタリオ」湖に面し交通の便宜しく風景亦佳絶である以前佛領であつたが其頃人口僅かに九千人位しかなかつたとかいふが現今は五十二萬以上の人口を有して居る今より百三十五年前に佛國が「インヂアン」土人より八十五弗で買

取つた處だと云ふが急速の進歩には一驚を喫する。バンクーバー迄二千七百二十哩ありて紐育から五百四十六哩北に當ると云ふ。

二日 晴

七時起床 午前中に田口君と同行して市内目貫の繁華の町を散歩して「ホテル」の前通の十字街頭に來ると其處に大なる乗合自動車がある其車は市内有名なる箇所を見物せしむる案内自動車で其處で御客を待合せて居る自分達も見物人の仲間入をして無蓋の自動車に乗る乗合客は何れも田舎者ならん(自分達と同じく)續々と乗込み十幾人となつたそこで運轉を始め所謂山の手の方へと奔り出し古き寺院が幾箇所も巍然と聳えて居る前を通り一々止つて説明をなす其時には大なる喇叭に口を當て、客の方へ向け其音聲を大ならしめて客の聞き洩らさぬやう注意する併しながら自

分は聾者に均しい故に馬耳東風だが要用なる箇所丈は田口君より譯して説明を聞いた夫れから大學校(此校は加奈太大學とて日本からも留學して居る方も澤山あると聞く)校舎の前或は市役所、オントリオ州廳等の説明を聞き州廳前の廣場で下車した廳前に立つて見渡せば一面青毛氈を敷き詰めた様な芝原で其中間に十字に道路を取り公園式に紅白の美花で處々花文字を顯し實に一種異つた趣がある右に聳々たる大學の校舎軒を並べ左は道路を隔て、大厦高樓が楯比して居る先づ案内者に導かれて廳内各室を見物す其建築は中々宏大で近古の参考品があるけれども一々記憶が出来ぬ一同見物を了り乗車して元の十字街頭で分散し「ホテル」に歸り午餐を喫す午後は室内にて休養し八時發の夜汽車に乗込み「バンクーバー」急直行の寢臺中の人となり夢境に入る。

三日 晴天後曇

五二

朝七時起床 今朝來兩人とも急行汽車で動搖甚しき爲め少々氣分が悪いなど語り合つたが次第に慣れた爲めか幾分づゝ回復した窓前を眺めつつ進行を續けたが朝來山又山を登り所々に沼湖を見る二首の俗歌を得た沼湖の畔に茅葺の繁れるを見て萬空場マンクウバへ向ふ心も空ならずよしあし繁き我旅路かな歸來る長き旅こそかなしけれ片身の髪をふところにして十一時「シャベロ」停車場に著十分停車す此間に停車場構内を散歩して氣分も大に爽快となる此處は「オンタリオ」州で海拔千四百尺の高地であるとか此停車場を發車すると次第に山又山を登り約一時間餘を経てから兩側は森林打續き老樹鬱蒼として晝尙ほ暗い程で何百年斧鉞を入れぬ處かと想像せらるる時には老朽して倒れ或は其儘で幾多枯死するのも見える實に米大陸

の曠大さが判然する又丈餘もあらんと思はれる怪岩奇石の處々に屹立して深山幽谷の趣を添へる又少し平坦なる處には所謂山間の御花畑とか云ふか誠に美麗なる高山植物の繁茂して目を慰めるのがある古句に「山花開似錦、澗水湛如藍」とあるが先づ此邊の様な景色の形容かと思はれる先年自分は上州榛名山に登つた時の御花畑に略似て居るなど話合ひながら十二時頃に至り一大湖水の畔を過ぐ然し山間に在る湖なれば舟楫の往復もなく唯閑鷗の水面に浮ぶを見るのみである此邊より次第に降り勾配となり速力漸次加はり随つて動搖甚し三時十五分に一小停車場に著いた「ホワイトリバー」と云ふ（白樺の義）に僅かに數十戸の人家あるのみで四圍皆森林であるが土地の名の如く森林は皆白樺のみ是れ又山間の特色である自分は前年信州の高原（富士見驛）に避暑を兼ねて禪の接心會に臨み渡邊子爵別邸

五三

内に五六日滞在したことがあつた其時に後山の林に白樺の樹が澤山で始めて見た自分には珍らしくて皮を持ち歸つたことがあつたが「ホワイトリバー」のは中々大木のみで富士見驛と比較にならぬ又午後五時頃より西方遙かに大湖水を望む「スベリー湖」と云ふ七時頃湖畔を通過する時恰も食堂で晚餐中であつた斜陽水面を照し金波銀波躍る景色は實に活畫を展するが如きである程なく寢臺の人と爲り安眠を得た。

四日 晴

午前八時起床 床頭にて兩人とも朝食を済ませ今日は亡兄の二七日に相當する故心ばかりの讀經をなして冥福を祈る此日朝來過る所山なく平野廣漠として所々村落の散在するを見るのみであつた耕作地相連り又青々たる平野に牛馬群を爲して水邊を徘徊する牧場を見受けた。

偶 感

極目平蕪翠接室、成羣牛馬水之東、自由飲嚙無羈束、一笛集來隨牧童
 十時半「マニトバ州」ウエニヘツク町の停車場に着き三十分停車して十一時に發した午後も午前中と大差なく一望際限なき平野を走り續けたが綠青葱とした處と黄金を舖き並べた様に黄熟した處と半黄色を呈する處と交互參錯して居る故に格別人目を慰めた是れは麥の一種だと思ふ概して米國式の耕作は自動車又は二頭或は四頭立の馬車にて耕し直ぐと種子を蒔付ける遣方なれば誠に無造作にて一耕地でも何町歩あるか分らぬ位で整然と區劃してある又牧場も大抵二つに分割して一方に牛馬を放ち他の一方は青草の種子蒔き冬季の飼料を盛に收穫して居る此日夜に入り九時「ムージョウ市」に著いた此地は「シカゴ」より「バンクーバー」へ向ふ交叉點で自分

等は「ナイヤガラ」及「トロント」を経て此處へ來たのであるが紐育から「シカゴ」を経て此處で兩線落合ふのである自分は既に寢臺の人となつて居たので停車場の光景も夢の中であつた。

五日 雨

八時起床 朝起窓車より見渡せば今日は春雨の如く肅々と降り却つて眺望が落付いて居た昨日と大差なく牧場と耕地とが打續いたが一時間許奔ると次第に高くなり山へ山へと登り行く此處に到ると耕地は姿を隠して牧場のみとなる十時に「カルガリ」停車場に着し十五分停車した此處は落機山の麓にて「パンフ」より流れて來る一大河の畔に在り此處を發車し河に沿ひ次第に山脈にかゝれば右は峩々たる奇峰峻嶺雲際に聳え左には怪岩奇石虎豹の踞る如く峭壁懸崖千態萬狀言ふべからず三時間ばかりの後に

「パンフ」停車場に着いた時は午後一時十分であつた此線路を旅行する人は「パンフ」或は「レークルイス」の二箇所には落機山中の勝地として必ず下車するが「パンフ」の方は「レークルイス」より見物の價值があるとのとで此處に下車した停車場には數臺の自動車



前ルテホフンバ

車が夫れ／＼各「ホテル」より客を迎へに來て居る自分共は鐵道會社經營の「パンフホテル」へ投宿すべく澤出の客人と共に出迎の自動車に乗り走り出し

た此の町は可なり人家もあつて山間とは覚えぬ位に町幅も廣く此處彼處に「ホテル」の聳えるのが見えた自分共の著いた「ホテル」は一番奥まつた處で

眺望は佳絶である建築は宏壯であり紐有邊の「ホテル」とは一段趣を異にし
て居る此地は八月の炎暑と雖も間近い處に白雪皚々とした峻嶺奇峰が重
疊して海拔四千尺以上の場所へ各方面より避暑に夏期中滞在して居り殆
ど満員の有様である「ホテル」に著くや受付に往き部屋を極める迄には可な
り時間を要する之を待つ間に數十組の客人は右往左往して景色を眺める
自分も其一人である先づ見渡した處左右前面に巍々とした峻峯屹立し兩
峯の盡る峽間を溪河帶の如くに流れ夫れがうねりうねつて遠く流れ遙か
向ふの山の麓迄霞と共に消えて行く有様は一幅の山水畫を展観するの概
がある又眼下庭園を眺めると溪水を引いて人工的に遊泳場を作り二箇並
列してをる一は冷水一は温氣を加へて客人の嗜好に應じ隨意浴泳せしむ
るに備ふ其周圍は青氈を敷き並べた様なる芝原の中に所々花壇あり紅白

紫黃の花は美を競ひ艶を戦はし山間とは思はれぬ風情あり此景色を上下
左右より眺望する構造は天然景以外の趣を添ふ斯くて各自室も定り「ボ
イ」の案内にて所定の部屋に到る自分共の室は二階で恰も窓下に「テニスコ
ート」場にて其下段が前に述べた遊泳場なので居ながら天然の風光と人工
的技藝とを一眸の下に萃めたで最上々の室であつた 此の夜一泊、

六日 晴

朝七時起床 九時食堂で朝餐。

偶 成

群峰屹立白雲間、兩峽雙開碧水潺、身在懸崖高閣上、俯聞巖瀑仰看山
此朝食堂で圖らずも鐵道省の玉兒君に逢うた此の方は故兒玉大將の令
息で當時鐵道省より派遣せられて歐洲各地の巡視を了へ目下米國巡視中

とのことで近々歸朝の豫定だとか我々に近付きに來られた尤も自分共でも異國で日本人を見れば不言の内に友情を發揮するもので食事中も向ふの卓に同胞が居られると兩人にて嘯いて居たが兒玉君より先鞭を著けら



ハ 忽ち舊知の如くになり食後
 フ 自 共々散歩に出掛け庭園より鬱
 分 と 蒼たる樹間の急坂路を曲折し
 溪 田 て下り溪間の水流の畔に歩を
 流 口 進め此處で兒玉君が獨逸製の
 の 氏 「カメラ」を我々に向けられた田
 畔

口君も亦之に倣ふ溪水は幅六七間もあるが急轉直下して四五間の斷崖より瀑布となる所謂「萬斛明珠飛峭壁」又は「一條白練挂危岑」の有様である夫れ

から此瀧の上流の沿岸を攀登つて行くと谷間に平地がある此處に養魚場あり幾個の貯水池に數百尾の魚が浮泳して池毎に魚類の大小が異ふ其傍に立派なる建築があつて階下には魚類の孵化から漸次に成長して行く迄の順序を實現して一目瞭然たることを得る様になつて居る此邊を十分散歩して十一時前室に戻り午後一時五分發の汽車に投じて「バンクーバ」へ向ふべく「ホテル」を出發した旅は道連れ世は情と云ふ諺があるが到頭兒玉君と道連れとなり共に「バンクーバ」へ向ふことにして汽車中も歐洲の談やら何やかやと伺うて面白く過し仕合をした。次の停車場が「レークルイス」で此亦落機山中の勝地として大湖水の畔に旅館が建てられて好景色だといふ随分旅客の下車したのを見受けた此處を通過してまだ「登勾配」で汽車は走る。

盡日不離山又山、車馳深壑茂林間、登來高嶺三千尺、冷氣侵膚宿雪斑、

戯作

のほり來し高根の上の客人はいやしき身にも雪の上人

程なく大なる瀑布が遙かに峯の頂上より白布を垂れる如くに望まれ誠に
美事であつた次第に登りつめ遂に分水點に達した此處が英領「コロンピヤ」
州と「マニトバ」州との境で州境の界標が立ちて溪水が兩方に分流して居る
のを見受けた夫れより幾分づゝ下り氣味で汽車は進行したが對岸の山々
は屏風を立てた様に見受けた三時五分に一大隧道に入つた此の隧道は傾
斜が甚しいので屈曲して傾斜を緩めてあるとのことであるが三分間二分
間と出入して前後三回で十五分を費し三時二十分を出て了つた夫れから

次第に下ると一大河に沿うて走る河向ふの斷崖絶壁の風景は實に雄壯で
流石は落機山だと三歎するの外はなかつた此邊に來り非雨非霧と云ふ有
様ではそれが所謂嵐氣ならんと思はれた三時半に一停車場に著いた「レーベ
ルストーリー」と云ふ此處に一大旅館があり避暑客の充滿して居るのを見受
けた此の日山又山を下りたが風景の佳なる處ばかりであつた八時就床安
眠を得る。

七日 朝六時起床

窓外の景色を眺むれば汽車は前夜來の川流に沿うて奔つて居る向ふ山
の絶景は千態萬狀筆を擲つより外ない偉觀である漸く一時間ばかりで對
岸の山岳も次第に低くなり民家を四五軒づゝ見受ける處もあつたが朝霧
の爲め遠山を見晴らすことが不可能であつた暫くして旭日急湍に映じ金

波躍る有様は、紅暎流影雪花翻とでも形容するか夫れから川幅次第に廣く湛へて淵となり巨岩怪石所々に點在して嶋嶼をなし其間は逼つて急湍岩角に激し球環を散らすかと疑はる此の風景も永く繼續することを許さず汽車は忽ち鬱蒼たる森林中に入つた折から山霧深く籠め旭日は濛々として満月を仰ぎ見る心地がする。

朝日かけ木の間の霧に映ろひて臘月夜の心地こそすれ

仰ぎ見る山の端出し日の影を秋の中の月かとぞ思ふ

夫れより次第に下つて村落耕地の間を奔り遂に十時、バンクーバ停車場に著いた直に一行(田口、兒玉、自分)三人は自動車で、バンクーバホテルに到着した田口君と自分は三階の一室に入り兒玉君は一室隔てた室に陣取られた先づ、是れで長々の汽車旅行も終焉を告げ此處で緩々疲勞を休め十

日に汽船に乗り込みさへすれば夫れで横濱迄世話はないと思つた夫是して午餐を攝るべく食堂に赴かうと廊下から旅客休憩室に入らうとすると圖らずも紐育で久しい間高峰一家と親交のあつた牛窪氏父子に邂逅し食堂に入り午餐を共にした此の牛窪氏は紐育に幾十年居住せられ京都山中商會の紐育支店での元老株で山中商店が紐育に開店以來今日迄至誠一貫商會の爲めに盡され年と共に業務を擴張せられ今日の紐育に山中商店の名を成さしめられたのは此人の功勞と言ふも過言ではあるまいとのことである同氏令嬢米子君を携へ歸朝せられる爲め一兩日前に當地に到着せられ十日の便船を待つて居られるとのことと我々兩人も好い道連れが出来て大喜びである君は兄の不幸を弔はれ兄が在世中の物語りども互に談合ひ時ならぬ言葉の花も咲き誠に嬉しかつた午後は牛窪氏に誘引せられて

當地の競馬場へ見物に行くこととした夫の先導者は牛窪氏の友人なる此
 沿海岸に漁業の元締を營んで居られる岡田某氏で實に勤勉家であるが此
 競馬が唯一の道樂で一年一回の此地の競馬に五日間乃至一週間の開場中
 は一日缺かさず二千三千弗は棒に振る覺悟で賭けられるとかいふことで
 あつた豫ねて牛窪氏を招待せられる約束のあつたこととて岡田氏は自働
 車で迎へに來られた牛窪父子に兒玉君と自分とは御相伴に同行した競馬
 場は市外の廣場に建設せられ入口は自働車と人波で充滿せられ流石場所
 柄とて人氣沸くが如しである入口にて入場券の買入等萬端岡田氏の奔走
 で一行棧敷の中央部を占領した體で競馬の始まる前に番組を配布する紅
 白黃紫等種々の色合で區別を付け五組乃至七組十組と時によつて交代す
 ることになつて居る配布が濟んで愈々第一番が幾組か列を正して騎手が



競馬場棧敷
 牛窪米子。讓自。分。牛窪氏

馬に跨り場内を一回徐行する此
 有様を見て幾百千の見物人は一
 二三四五等色合により此馬に此
 騎手なれば勝ちさうだと名々座
 元へ走り紅に何弗白に何弗と自
 分の好みに應じて賭ける尤も此
 の競馬場は一枚一弗との規定で
 五枚十枚乃至五十枚と夫れは人
 々の懐中次第で勝てば一弗が幾
 弗でも其の時に負けた人が多け
 れば多い丈け一弗が幾倍になつ

て戻るので夫れ故に皆一生懸命である其状景は戰場も斯くやと想像せらる却説愈々開場一番一聲の爆竹で馳せ出す見物人は奔めき渡る自分の札を入れし馬に掛聲して夫れ勝てくと云ふ有様聽て決勝點近くなれば満場喊聲雷の如く實に愉快で其状凄じき哉である一番済むと一同立騒ぎ札と現金とを交換する二番三番と番組も重り遂に五時頃迄見物して岡田氏に送られて共に「ホテル」に歸る自分は競馬杯は曾て見物したことなく此の異境で始めての終りなるべしとは是も牛窪氏の賜と深く感謝した此夜腹具合悪しきゆゑ下劑を服し瀧腸して寢に就いた。

八日 朝晴

此日一日節食して寢臺の人となり夜に入つて明日汽船に積込む荷物の整理をなして就眠した。

九日 曇

七時起床 食前に先づ瀧腸した後結髪衣を整へ朝食を済ませ一行牛窪父子、田口君、及自分、見玉君は沿海岸地方を巡視せられ次の便船で歸朝とのこと、四人は當首府なる「ビクトリヤ」を見物して後十日の夕方汽船に乗込む豫定なれば先づ自動車で波止場に往き大荷物「エンプレス、オブ、エシヤ」號に積ませ手荷物丈として自分共は「ビクトリヤ」行の小蒸氣船に乗込み波路靜かに徐々と動き出した此航路は日本の瀬戸内海を航する心地で大小の嶋嶼基布散在して送迎に暇あらず又一方大陸の方を眺むれば峯巒相連り淡粧濃沫實に絶景である或人は此嶋々の間を航する有様は我國の松嶋を遊覽する趣があると言はれたが實は燈臺下暗しで未だ松嶋を見物せぬゆゑ比較は出来ぬ。

夕方五時に「ビクトリヤ」に著いた波止場より自動車に乗り直ぐ目と鼻の様に近い「エムプレス、ホテル」に荷物を置き其車にて市内見物と出掛けた折柄小雨蕭々誠に濕かたで気分も落付き喜しい此「ビクトリヤ」は半嶋で鐵道は連絡し居らず「バンクーバ」若しくは「シャトル」から汽船の便あるのみなれば内市も繁雜ならず誠に樂園地で英國の金持が別荘式の家屋庭園を有する處で到る處花卉ならざるはなしであつた尤も自分等の輕車で見て廻つた處は主に總督の官舎とか富豪の邸宅とかで外見ながら紐育其他の米國式とは其の趣が違ひ流石英國の閑雅で奥味しさが偲ばれる尤も氣候は八月十日前後のことで炎暑金を鎔すといふ時節でも此の地は左程暑からず當時薔薇の花盛り其の外紅紫黃白種々の花卉で實に麗しく久々で心神を慰めた又海岸には天然生の「エニシダ」の大木鬱々と繁茂して居り晩春の季に

は黄金色に變じて嘸や美事なるらんなどと相像せられた此見物小雨中であつた爲め公園は見逃したが主なる箇所を巡視して「ホテル」に歸著した此地方は六十日ばかりの旱魃で今日の降雨は草木を蘇生せしめる甘露だと人々大喜びであつた夫れも其の筈である到る處の芝原は青々と綠色を呈する筈なのに時ならぬ又黄金色と變じて居たのに因つても判ぜられた夫れから是れも亦旱魃の爲の災害であるが自分共落機山を下つて次第に「バンクーバ」近くなるに従ひ霞棚引くと云ふか又は濃霧濛々とも言ふか山々が薄衣を被つた様に眺められ又は甚しきは旭日が朧月の様に見えたのも全く山火事が起つて數日延焼して消えず其烟が數里四方へ擴がり右の現象を顯したのであるから今日の降雨は是れ又消防代用でもある。

此夜は雨も小止みとなつたゆる牛窪令嬢の誘引で活動寫眞見物に行き

面白く一宵を過し歸宿寢に就く。

十日 朝六時起床 晴曇

八時食堂にて一行と共に會食して後市内の町々を見物し又買物もした
が交通不便の爲め町も繁華ならず見物する程の價値もなかつた午後五時
半に波止場に往き愈々米大陸の土地を後に名残惜しくも横濱直行の「エン
プレス、オブ、エシヤ」號に乗込み出帆した。此船は「カナダ」汽船會社の船で速
力非常に速く太平洋丸杯とは船の長さの割に横幅狭く動揺も甚だしい殊に
北洋の荒波を突破して進行するのだから自分如き乗船に不慣の者は中々
人並の行動は取れず往途は一日も早く阿兄に遇ひたしとの一念で割合に
元氣であつたが歸程は落膽して勇氣も挫けへこたれた。夕食は船中食堂
で一行四人一坐で氣持好く食した此の船は食堂は頗る美味で御馳走は十

分である船中に日本人の客は十人以上あり卓も四組ばかりあつた。

十一日 朝來好き氣分になれず終日寢臺上の人となる。

十二日 朝起床 晴後曇

朝食は室内に取寄せて喫し食後半窪氏來訪少時談話の後兩人打連れ甲
板上を二回散歩して後米子嬢の室を訪問して少憩する此室で井上夫人に
初對面して知人となる。夫人は米國に四年間夫君と共に居住せられたと
か今回夫君が會社の用向で歸朝せられるので夫人も久々で御兩親に面會
の爲め同行せられた由を語られた既にして室を辭して自分室に歸ると程
なく井上夫人來訪せられ彼地の談など打解けて語られ復共に休憩室に往
き他の日本人二三人も來會せられ楽しく午前中は過ぎた午餐は食堂で會
食する元氣もあつたが午後よりは船暈の氣味あれば室に籠り就床の已む

なきに至つた四時五時頃より海霧深く咫尺を辨ぜず時々汽笛を鳴らし警戒して進行する有様のゑ夕餐は室内へ取り寄せ少量を攝取するのみで此夜は過ぎた。

十三日 朝曇後晴

朝來北洋波荒れ怒濤舷を打ち簸動次第に甚しく随つて船暈を感じ午前兩回の嘔吐をさへ催し身體大に疲勞を覺ゆ氷囊を頭に當て靜臥して氣分を落付けた午後に至り幾分波も穏かに好天氣となつたので氣分も自然と回復したが腹具合は依然たりで此夜を過したが次第に北に向つて進行するので時々刻々寒冷を覺えつゝあつた。

十四日 曇

今日は終日臥床の人となり食欲も進まず少量を攝取したのみ昨日に比

し寒氣一層甚しく室内煖爐を用ひても中々凌ぎ難く防寒用の衣類を被つて尊中に臥した。

堪察加海歸航偶成

舟行北海浪汪洋。盛夏如冬急變裝。身著絨衣不知暑。昏々有夢到家鄉

十五日 晴

是日も終日起きず。

船は西へ西へと進行する故に一日の差を生じ十六日一日を飛ばし十七日となる。

十七日 晴

風波荒く尙ほ起きず。

十八日 朝曇一時晴

朝來風收り波靜かに次第に温氣加はり徐々と人間らしく入浴結髪する氣分にもなり食欲も増進して午後には久々で甲板へ散歩に出掛け井上夫人牛窪令嬢等と談話を交へることを得た。

十九日 晴

朝食は室内に取寄せて済ませ喫煙室や甲板上をぶら付き後米子嬢の室を訪ねたり元氣も大分回復した此日より急に温暖を加へ衣類も出帆當時と大差なく絹の單衣に同じ羽織位となつた晚餐は特別の注文で我々一行の食卓に支那料理の珍味が並んだ實は久し振りで舌鼓を打つた元來此船は料理人及ボーイ等は皆支那人のみ使用するが西洋料理も材料を吟味して調理も上手なので船客は皆満足して十日間を過す位である自分等本國の料理は無論御手の物なのである但自分の如き船に弱い者は折角の珍味佳

肴もあらばこそ「トースト」に紅茶位で半分は経過した故に船主へ對しては先づ忠實の方であらう呵々。

二十日 晴

朝窓に旭日射込み實に長閑なる好天氣であつた最早日本へ近づいたこととて海面も自然靜かに我國の嶋山も見える頃だと人々言ひ合つて居る折から久々で朝食すべく食堂に出掛け御互に「オハヤウ」の連發食後に一行打連れ甲板上を散歩すると遙かの沖合に嶋々が見え出した是れが日本の津輕邊だらうとのこと其嬉しさ何に喻へん様もなしであつた次第に金華山沖へ近づき燈臺や山の麓の人家迄も見え漁舟の三ツ四ツ木の葉の散る様にも眺められた。

朝まだき霞む遠山見え初むる此れぞなつかし我あきつしま

朝がすみ棚引く間よりほの／＼と見え渡りたる秋つしまやま

陸奥のこがね華咲く山なりと覺えて遠く見さけつるかな

此日は夜に入る迄時々甲板に出掛けて我國の沿岸を打眺め彼處は何々此處は何々と實に愉快であつた尤も自分の國を船中より眺望するは此れが一生の始めてで又終りならんと思ふと自然亡兄の生前何十回となく此洋上を往復せられたが最後に一回自分等と共に歸朝なされたなら同じ眺望も其の楽しい程度が違ふなどと彼是を聯想すると氣分も陰鬱となり不
想涙濡巾となつて來て早々船室に飛込み荷物の取片付で氣を紛らかした
却説明日は早朝横濱着港といふから今夜が船中の納めだと今更名殘惜しい心持もする。

二十一日 晴

朝五時起床結髪更衣等夫々支度も整つた折柄檢疫との報に接し階上休憩室に往かうとしたが是れは形式で病人丈位の検査で一同(一等客)は夫れに及ばずとかで引返して室に歸る夫れ是して居る内に船は容赦なく進行して横濱港内に入り七時には棧橋の岸壁へ横付けとなつた七時半に食堂で朝食を喫す此れより船客を出迎への人々も追々と來船あり井上夫人牛窪父子にも別を告げ自分共は九時入港と電報を發して置いたので未だ來られる筈なく手荷物が高野屋旅館に取扱はせ税關の手續をも依頼した聽て時刻も移り九時頃になると追々と親戚知己の人々も來られ互に久闊を叙し無事を喜び又一方不幸の弔詞を述べられ一同休憩室に一團となり共に歸京する筈なのだが肝要な荷物が税關より高野屋へ下渡にならぬとのことで已むなく出迎の方々に一足先きに櫻木町に待合せて貰ひ分自は田

口君に伴はれて高野屋方へ赴いた中々著かない其間田口夫人の叔父上古谷君に種々御世話になり漸く十一時半に櫻木町を發車した車中で出迎の方々と互に談話を交へたが此日炎暑甚しく出迎の人々も嘸御迷惑のことと推察した殊に自分等は船中大半は冬日の如き寒氣の爲めに苦しめられ今亦却つて急に炎熱に遇つたこととて一層暑さを感じた程なく東京驛に著いた亡兄の遺髪を捧持しての歸朝ゆゑ鹽原氏始め三共株式會社に關係の方々迄も出迎へられ感謝の辭を知らず唯々暗涙を吞む迄であつた遺髪は田口君が持參せられ鹽原家の佛壇に安置して他日青山墓地に埋葬の筈である此處で出迎の方々及び長らくの旅行中兄弟母子も及ばぬ面倒を見て戴いた田口君にも別を告げて自働車で鹽町の宅に安著し夜に入つて鹽原邸を訪問し紐育の事情を語り鹽町の自宅に歸つて一泊。

二十二日 晴後小雨

此日午前中に斯波、長野、鈴木の三嬢來訪久方振りで彼地の事などを談じ又留守中の事共をも聞き午餐を共にした夕餐は主人が品川で獲られた魚で舌鼓を打ち夜に入り深川の藤井家に到り一泊。

二十三日 雨後大風雨

此日は藤井若夫婦及吉田夫人來訪あり互に久瀧を叙し主人夫婦とも交談盡きず午後四時同家を辭し五時十五分東京驛發長野氏一行と共に竹橋兩孫を連れ七時無事茅ヶ崎驛著東海岸の隠棲に安著した。途路雖好不在家。

渡米日記終

跋

本朝巾幗者流禪に參ずるもの古來甚だ多し、白隱下に雄
察あり、於政あり、阿三あり、佛光下に如大あり、白鷗下に了
然あり、一休下に地獄あり、是れ其尤なるものなり、其他、大
姉の機用時に總持を凌ぎ、禪妃の作略或は鐵磨を罵るも
の僂指に違あらざるなり、相陽の渡月嬢また吾社中の一
人なり、頗る教外の宗を慕ふ、近ごろ一書を著し袖にし來
つて予に示さる、書中略ぼ三篇を具す、予始め回想録の一

篇を讀んで覺えず聲を放つて曰く錯次に渡米日記往路
篇を讀んで覺えず案を打つて曰く果然又其歸途篇を讀
んで覺えず卷を抛つて曰く點且らく道へ予恁麼の説話
意那裏にかある曰く千聖も直に是れ見不得萬賢も遂に
是れ觀不破何が故ぞ若教頻下淚滄海也必須涸

大正甲子稔夏日

入竺

寶

嶽

閑 妄 想 大尾

大正十四年一月八日印刷
大正十四年一月十日發行

(非賣品)

發行者兼
東京市四谷區豐町三丁目四十三番地
竹 橋 順 子

印刷者
東京市本所區番場町四番地
守 岡 功

印刷所
東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

285
123

終

